

大和郡山市額田部北町

松 山 古 墳 I

第1・2次発掘調査概要報告書

1991. 3

大和郡山市教育委員会

大和郡山市額田部北町

松山古墳 I

第1・2次発掘調査概要報告書

序 文

大和郡山市教育委員会では、平成元・2年度にわたり、市内額田部北町に所在する松山古墳の調査を実施いたしました。

市内に存在する古墳は少なく、その中で当古墳は墳丘の残りも良く、きわめて高い価値を有しております。しかしながら、すぐ近くまで住宅開発が追し寄せてきており、早晚、この古墳も開発によって失われてしまうかもしれません。

このような危惧の下、古墳の保存と活用を図る目的で調査を実施したわけです。その成果によれば、県内でも有数の規模をもつ大形円墳であることが明らかとなり、学術的価値がさらに高まりました。今後は、こうした調査成果を含めしつつ調査活動を継続していきたいと考えております。

もちろん、今後の調査の遂行には、土地所有者の方々や、地元額田部の皆さん方のご理解・ご協力が欠かせません。2年に及ぶ調査では、所有者のご厚情を賜わり、また額田部北町・柏木町両自治会の皆さんのご協力を得ることができました。ここに深く感謝したいと存じます。なお、これからも鋭意調査を進めてゆく所存ですので、変りなくご支援を賜わりたくお願い申し上げる次第です。

平成3年3月31日

大和郡山市教育委員会
教育長 井 上 三 夫

例　　言

1. 本書は、大和郡山市額田部北町351番地に所在する松山古墳の第1・2次調査の概要報告書である。
2. 調査は、大和郡山市による平成元年度及び平成2年度の文化財保存事業（埋蔵文化財緊急発掘調査事業・国庫補助率50%、県費補助率25%）として実施した。事業費・期間等は下記の通りである。

(年　度)	(事　業　費)	(調　査　期　間)
平成元年度	1,000,000円	1990.3.5～1990.3.31
平成2年度	2,000,000円	1991.2.18～1991.3.31

3. 調査体制は下記の通りである。
(調査主体) 大和郡山市教育委員会 教育長 井上三夫
(調査事務) 大和郡山市教育委員会 社会教育課
(調査担当) 大和郡山市教育委員会 技師 服部伊久男、山川均、濱口芳郎
4. 調査に際しては、下記の方々のご理解・ご協力を賜った。記して感謝いたします。
池田勘左衛門（額田部北町753番地）
山田幸男（額田部北町391番地）
藤谷英子（額田部北町250番地）
柏木町自治会長 大西方男
額田部北町自治会長 山中建三
額田部北町自治会長 森川修
5. 調査には下記の作業員、補助員が参加した。
(作業員) 岸田勝信・杉山典三・市井義治・米田利男・堀川正治・大堀一夫・谷渕喜一・中島治雄・中川憲・喜多美寿子・城タマゑ
(補助員) 御宮司和史（関西学院大学）・宮崎秀俊（関西大学）・藤岡英礼（高野山大学）・荒木浩司・下大迫幹洋・本村充保・伊藤敬太郎（奈良大学）・大西貴夫（三重大学）・福島孝行（同志社大学）・竹内直子（京都女子大学）・武田浩子
6. 本書作成に当り、下記の諸氏から専門的助言・教示を受けた。記して感謝いたします。
奥田 尚（奈良県立橿原考古学研究所員）
7. 本書の執筆・編集は服部が担当した。

本文目次

- I 調査の契機と経過
- II 周辺の環境
- III 調査の概要
 - 1 測量調査
 - 2 トレンチ調査
- IV 出土遺物
- V まとめ

図目次

- 図1 松山古墳位置図 ($S=1:50,000$)
- 図2 松山古墳位置図 ($S=1:5,000$)
- 図3 松山古墳と周辺の遺跡 ($S=1:20,000$)
- 図4 大和郡山市域の地形分類
- 図5 トラバース成果一覧
- 図6 トレンチ位置図
- 図7 第1・2トレンチ平面図及断面図 ($S=1:100$)
- 図8 第1・2トレンチ測量図 ($S=1:100$)
- 図9 土器・瓦実測図 ($S=1:3$)
- 図10 石製品・石器実測図 ($S=1:2$)
- 図11 墓輪実測図 ($S=1:3$)
- 図12 南方古墳平面図
- 図13 南方古墳出土埴輪実測図 ($S=1:4$)
- 図14 南方古墳出土大刀形埴輪実測図 ($S=1:3$)
- 図15 挖ノ内古墳探集埴輪・須恵器実測図 ($S=1:3$)
- 図16 頼田部狐塚古墳出土埴輪実測図 ($S=1:4$)
- 図17 船墓古墳探集埴輪・須恵器実測図 ($S=1:3$)

写真目次

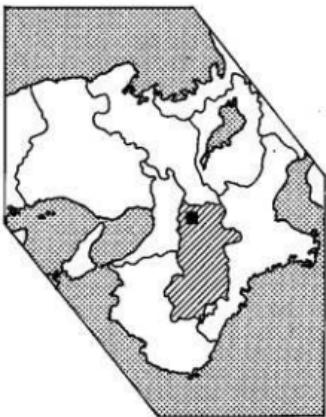
- | | |
|----------------|-----------------|
| 写真1 測量風景 | 写真2 墳丘遠景（南から） |
| 写真3 築成の状況（東から） | 写真4 西側裾部（北から） |
| 写真5 北側裾部（西から） | 写真6 北西側裾部（北東から） |
| 写真7 南側裾部（西から） | |

表 目 次

- 表1 墳輪出土層位一覧
- 表2 大和の大形円墳一覧
- 表3 大形円墳に関する主要文献一覧

図 版 目 次

- 図版1 (上) 航空写真 (北上空から)
(下) 遠景 (南西から)
- 図版2 (上) 墳丘近景 (北から)
(下) 墳頂部の状況 (西から)
- 図版3 (上) 墳丘細景 (北東から)
(下) 墳丘細景 (南東から)
- 図版4 (上) 第1トレント全景 (東から)
(下) 第1トレント土層 (北東から)
- 図版5 (上) 第2トレント全景 (北から)
(下) 第2トレント土層 (北西から)
- 図版6 遺物
- 図版7 遺物
- 図版8 遺物
- 図版9 遺物



大和郡山市の位置

I 調査の契機と経過

大和郡山市内の古墳の数はそう多くはないが、新木丸山古墳、六道山古墳、小泉大塚古墳、割塚古墳、額田郡狐塚古墳などの著名なものも存在する。これらは古く発掘調査を経てその後保存されているものや、陵墓参考地となっているものであり、急拡開発の憂目に合う危険性はない。ところで、市内の南端、大和川（佐保川）近くの額田郡丘陵に所在する松山古墳の近辺は、市街化区域に含まれ、最近アパートや賃ガレージ、分譲住宅等の建築が増加している現状にある。事実、数年前には松山古墳の北側隣接地に数棟の住宅が建てられ、また西接する古墳（西嶋古墳）にも民間業者の手がのびるなど、松山古墳の保存保護にかかる環境が徐々にではあるが確実に失われようとしていた。このため市教育委員会では、本格的な開発行為が起る前に、つまり、近未来的開発という危険要因による古墳及び周辺環境の破壊という事態を安全に担保するため、古墳の詳細な資料を備えその保存と保護を図ることを目的に緊急の調査を実施する方策を探すことになった。調査は国庫補助事業としてこれまでに2次にわたり行った。平成元年度は墳丘の測量調査が主で、約2,000m²を測量、ほぼ全形を知る得るほどの測量を行った。平成2年度は周辺地形と墳丘の一部を測り、測量面積は約10,000m²に及んだ。また、周溝の確認のため2本のトレンチ調査も実施した。2年度にわたる調査の結果、径52m、高5.4mを測る2段築成の大形円墳と判明、多大の成果を得ることができた。ただ、トレンチ調査では築造時期を確定するに十分な資料を得られず、以後の調査に委ねることになった。今後、こうした2年に及ぶ調査成果を基により精密な調査を実施してゆく必要があろう。なお、調査に際しては、土地所有者である池田勘左衛門氏、山田幸男氏、藤谷英子氏から調査用地の提供についてご快諾を賜わった。深謝する次第である。



図1 松山古墳位置図 (S = 1 : 50,000)

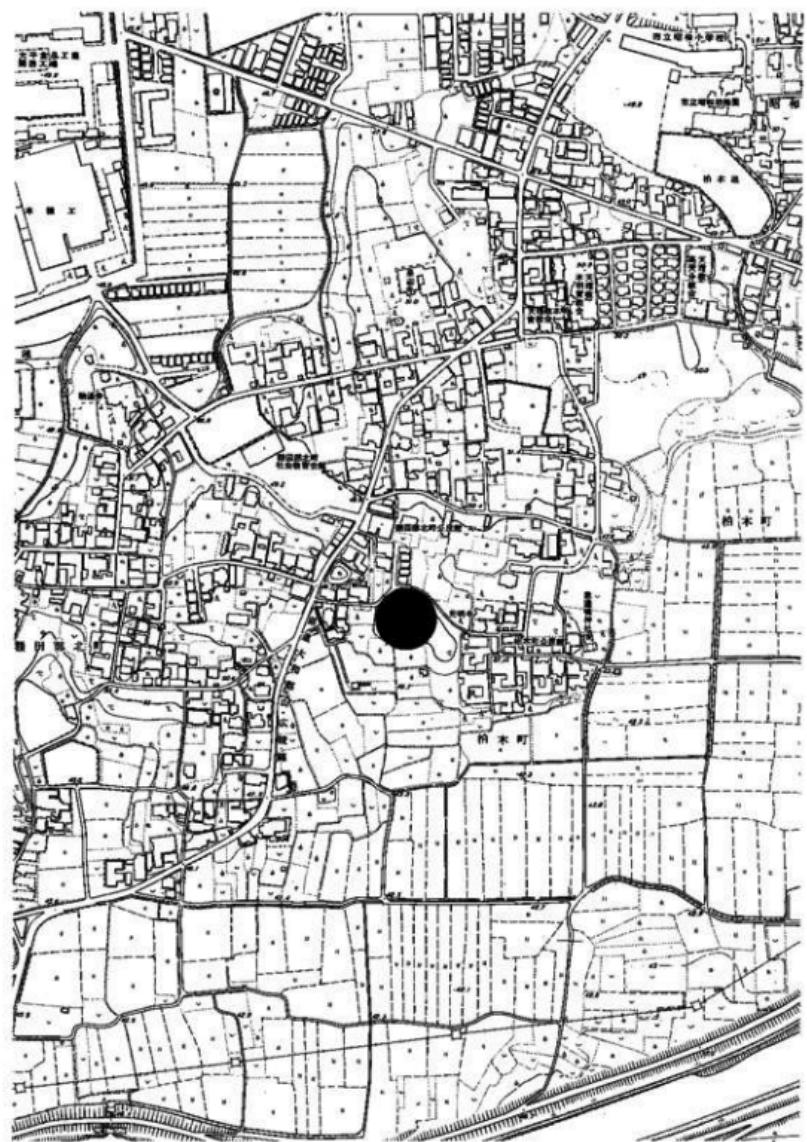


図2 松山古墳位置図 (S=1:5,000)

II 周辺の環境

松山古墳は、大和郡山市の南端、通称“額田部丘陵”と呼ばれる小高い丘陵地に位置する。この辺一帯は古い町並みも一部に残っているが、近鉄平塚駅が近いため小規模なアパートなどが増加している状況にある。大和川との間には水田が開け、丘陵地は主に畠地に利用されている。北方は昭和工業団地であり、大規模な工場が林立、往々を懇ぶべくもない。西辺には大和中央道が南北に走り、その両側にも工場群の進出が著しい。大和川（佐保川）、西名阪道路、大和中央道に囲まれ、のどかな田園風景と近代工場群がミスマッチに同居する奇妙な景観を成している。次に、額田部丘陵の遺跡について時代順に概観しておこう。

(編文時代) この地域では現在のところ未見である。ただし、東安堵遺跡¹⁾（東方約1.5km）、原田遺跡²⁾（北西約2.5km）で、後期～晩期の土器が出土しており、今後の調査の進展に期待されるところである。

(弥生時代) 大規模な遺跡はみつかっていない。ただ、今回の調査で後期の土器片とサヌカイト製槍や剥片が十数点出土しており、弥生時代の遺跡も早晚発見されることでしょう。

(古墳時代) 大和中央道下に未刊の大基たる著名な狐塚古墳（82）が寝っている。全長50m、後円部径26.5m、周濠を備える後期前方後円墳である。主体部は被覆粘土をもつ木棺直葬で、2棺が検出されている。北棺は長さ4.0m、幅0.8mの規模をもつ組合式木棺で、刀・劍・挂甲・馬具・ガラス玉等が出土、南棺は長さ3.9m、幅0.6mを測る組合式木棺で、鎌・馬具などが出土している。6世紀前半の築造と考えられている。通常この時期の前方後円墳には古式の横穴式石室が導入されるが、この地域ではその採用が遅れるようである。狐塚の北西150m、西町集落の北東端に径25mの堀ノ内古墳（81）が存在する、墳丘は削平されているが円筒埴輪が採集されている。船墓古墳（87）は径20m、寺の裏道により墳丘が破壊されているが、円筒埴輪を伴う。この古墳については著名な額田寺伽藍并条里図のX線写真の検討から前方後円墳と考えられるようになってきた。埴輪からみて狐塚古墳に後続する時期の築造であろう。また「条里図」には「額田部宿禰先祖」という記載があり、古く田村吉永などが注目、額田部氏の出自について詳しく述じられている。西嶋古墳（89）は径32mの円墳とされているが、墳丘の残りが悪く旧態を保たない。墳丘西裾を県道が切断し、南北裾部も住宅が取りつく状況にある。時期、出土遺物等全く不詳である。南方古墳（83）は水田下で検出された削平墳、周溝がかろうじて残っていた。径23mの円墳である。円筒系埴輪・形象埴輪の断片が多数出土、内太刀形埴輪は大和でも類例が少なく注目される。6世紀前半の築造である。来迎墓ノ間古墳群（85・86・102～107）は前方後円墳1基を含み円・方墳數基からなる古墳群。現在は市立公園墓地となっており、遺存状況は悪い。実態が判然とせず出土遺物もあまり知られていない。なお、この古墳群はさらに東側に広がっており、その構成数も増えることが最近わかっている。⁷⁾この地域で確実な横穴式石室墳は鎌倉山古墳（88）のみであったが、遺憾ながら最近破壊の憂目に迎ってしまった。



図3 松山古墳と周辺の遺跡 (S=1:20,000)

44. 敷布地 46. 敷布地 47. 頼安寺 81. 獅ノ内古墳 82. 狐塚古墳 83. 南方古墳
87. 船基古墳 88. 錦倉山古墳 89. 西堀古墳 90. 松山古墳 84~86・102~107. 末迎墓ノ間古墳群

(飛鳥・奈良時代) 頼安寺(47)は国宝の「額田寺伽藍并条里図」によりよく知られる寺院である。図に建國法で描かれた中心伽藍や雜舎は奈良朝の寺の有様をよく語っている。数次にわたる発掘調査が行われ、手彫杏葉文軒平瓦が出土するなど寺の創建は7世紀前半に遡りそうである。⁸⁾

(中世) 史跡額田部窯跡(98~100)は額安寺中興の際、その所用瓦を焼成したロストル式平窯で、総数3基が発見され、内西端の1基が現在見学可能な状態で保存されている。窯跡群に東接する五輪塔群は「鎌倉基」と総称され、国の重要文化財(建造物)に指定されている。解体修理が行⁹⁾われ、忍生の骨蔵器が出土したことで知られる。忍生は、中興に尽した高僧で、生駒竹林寺・鎌倉極楽寺に分骨埋葬されていた。中世高僧の葬制を知る上で重要な資料である。なお、五輪塔出土品も重要文化財(考古資料)に指定されている。¹⁰⁾

次に地形について。額田部丘陵は、比高5~10mの小高いもので、南北1.5km、東西1.0kmに及び、北東~南西方向に展開する。単純地形のようであるが、微視的にみれば谷地形と尾根筋が複雑に入りこんだ状況となっている。この丘陵の南側・東側は氾濫原を経て佐保川最下流部であり、西側は段丘面となっている。額田部丘陵自体は、高位段丘・中位段丘を主体として成り立っている。周辺にはこうした地形ではなく、この盆地低位部にあっては平地に浮ぶ陸の孤島といった感じである。

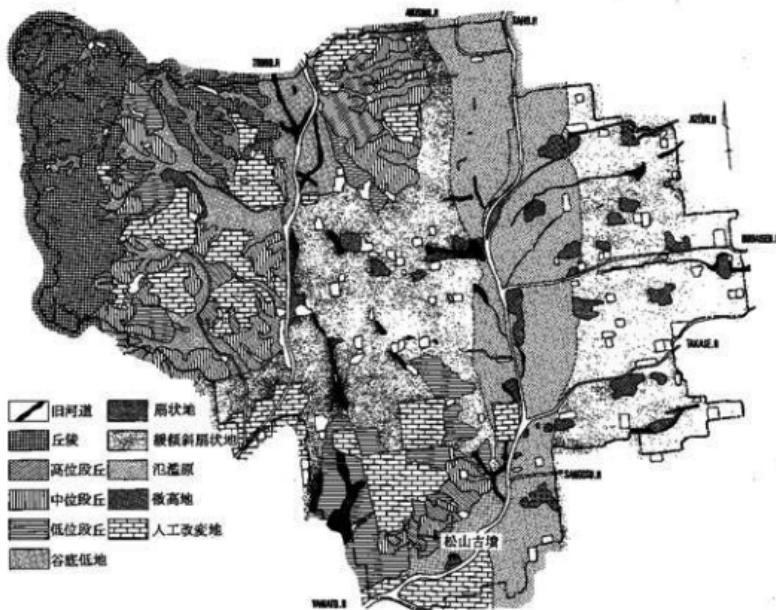


図4 大和郡山市域の地形分類(山川均 原図作成)

III 測量の概要

1 测量調査

測量の方法

古墳の測量前の状況についてまず記しておく。雑木・笹が繁茂し、藤蔓が伸びて木々の間々を連接するなど測量には全く適さない状況にあった。幸い地権者の了解を得、相当の伐採が許されたため既意木々を切り倒した。その結果、相当に見通しが確保できるようになり、また墳丘高や斜面の状況も概知することができたので次のような測量方法を採用した。

- ①基軸トラバースは開放トラバースとし、国土座標第VI系に完数値で確保する。
- ②測量の進捗に合せ枝トラバースを任意に伸ばす。竹藪等見通しのきかない地点では基軸トラバースと接続する閉合トラバースを組み込む。
- ③等高線は20cm間隔とし、縮尺は1/100とする。

①の作業は民間測量業者に委託して行った。水準測量は、現地の北西約0.7kmの大和郡山市昭和淨水場地内に設置されたB.M - 7 (46.30m T.P.) を使用した。枝トラバースの設定は現地担当者が行い、スチールテープで斜距離を計測、手計算で水平距離を算出する従来の方法に従った。平成2年度からはこの種の作業に光波測距儀を使用することになったため、作業の迅速化が図られ精度も著しく向上した。基軸トラバースは今後の調査にも必要であるため10cm角、長35cmの大形木製杭を使用、枝トラバースは測量終了後除去する必要があったため通常の4.5cm角・長さ40cmの木製杭を使用した。近年、古墳の測量・調査にも国土座標を利用する場合が多い。本墳の場合も周辺地の開発が懸念されたため、向後の調査に備えた不動の基準として座標を用いたところである。なお古墳測量時のトラバース杭は、数年に及ぶ場合は大形の木製杭やプラスチック杭を思い切って利用するのが適切である。小形の細杭では1年ともたないからである。閉合トラバースは都合、墳丘東側の竹藪部分の1ヶ所に組み込んだ。光波測距儀を使用し、角測定は交角法、閉合誤差はコンパス法に依った。等高線は通常25cm間隔で選ぶが今回墳丘の傾斜がさほどきつくなく、20cm間隔(1/100)でも十分選ぶことができた。古墳の形態について議論が高っている中、測量は細密に過ぎることはない。20cm間隔、さらに10cm間隔で等高線を入れれば、微妙な地形変化や墳丘の形状変化も図に表現される。これは、測量時の縮尺、測量範囲、対象物の比高差などの要素を勘案し決めればよいと思う。なお、測量に使用した主要機材は下記の通りである。

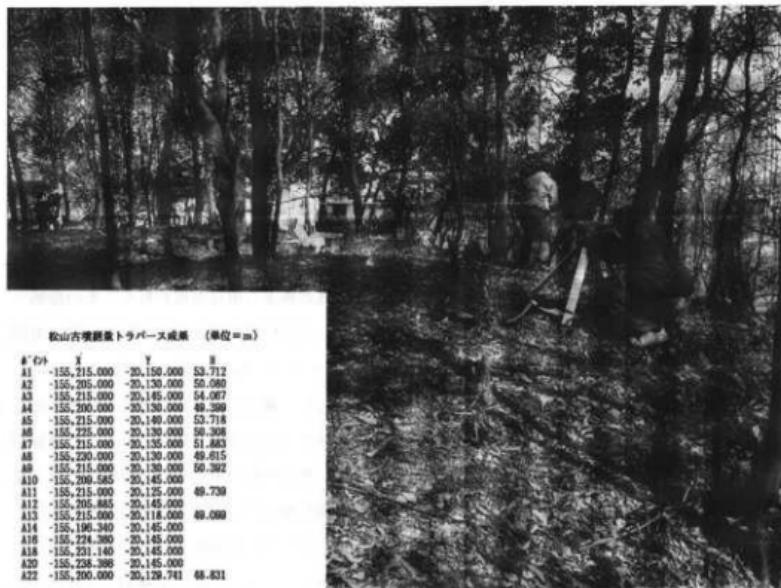
光波測距儀 トブコンGTS-510F

セオドライト トブコンTL20DF

レベル トブコンAT-F2

レベル トブコンAT-M3

最後に一応トラバース網の概略図と各測点の計測成果を図5に示しておく。



松山古墳測量トラバース成果 (単位=m)

	X	Y	Z
A1	-155.215.000	-20.150.000	53.712
A2	-155.205.000	-20.130.000	50.080
A3	-155.215.000	-20.145.000	54.067
A4	-155.200.000	-20.130.000	49.398
A5	-155.215.000	-20.140.000	53.718
A6	-155.215.000	-20.135.000	51.883
A7	-155.220.000	-20.130.000	49.815
A8	-155.215.000	-20.130.000	50.392
A10	-155.200.580	-20.145.000	
A11	-155.215.000	-20.125.000	49.739
A12	-155.205.885	-20.145.000	
A13	-155.215.000	-20.125.000	49.089
A14	-155.195.340	-20.145.000	
A16	-155.224.390	-20.145.000	
A18	-155.231.140	-20.145.000	
A20	-155.238.380	-20.145.000	
A22	-155.200.000	-20.129.747	48.831
B1	-155.215.000	-20.155.000	53.857
B2	-155.215.000	-20.160.000	51.110
B3	-155.215.000	-20.165.000	50.576
B4	-155.215.000	-20.170.000	49.950
B5	-155.205.000	-20.165.000	50.077
B6	-155.225.000	-20.165.000	
B7	-155.200.798	-20.160.000	
B8	-155.226.519	-20.160.000	
B9	-155.226.519	-20.176.854	
B10	-155.183.217	-20.160.700	
B11	-155.226.385	-20.160.000	
B12	-155.225.000	-20.171.066	
B13	-155.225.000	-20.178.988	
B14	-155.232.621	-20.180.134	
B15	-155.256.030	-20.157.256	
C1	-155.215.000	-20.176.000	48.942
C2	-155.215.000	-20.182.245	48.833
C3	-155.255.403	-20.171.006	47.932
C4	-155.244.318	-20.190.378	48.465
C5	-155.257.231	-20.145.000	48.324
C6	-155.240.000	-20.145.000	48.760
C7	-155.257.231	-20.156.788	48.304
C8	-155.177.424	-20.130.000	48.723
C10	-155.220.220	-20.101.374	48.715
C11	-155.175.117	-20.104.636	48.418
C12	-155.172.759	-20.176.598	
C13	-155.274.017	-20.125.052	
C14	-155.244.318	-20.145.000	
C15	-155.241.515	-20.145.000	
C16	-155.267.231	-20.123.012	
C17	-155.236.191	-20.113.770	
C18	-155.245.531	-20.117.040	
C19	-155.204.775	-20.107.475	
C20	-155.265.380	-20.106.421	
B1	-155.202.737	-20.190.805	
B2	-155.157.013	-20.179.798	
B4	-155.204.519	-20.111.411	
B5	-155.223.802	-20.098.500	48.575
B6	-155.242.540	-20.097.502	47.985
B7	-155.247.390	-20.100.001	
B8	-155.248.518	-20.115.610	
B9	-155.229.080	-20.130.624	

写真1 測量風景

松山古墳測量トラバース
(単位=m)

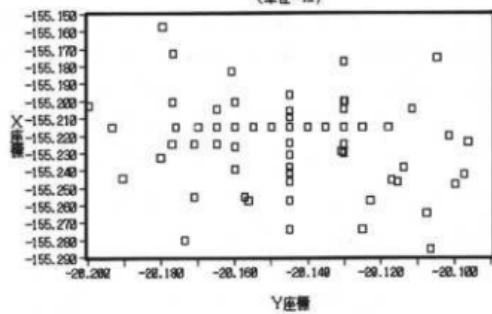


図5 トラバース成果一覧

墳丘の現状

松山古墳は大和郡山市の南端、額田郡北町に所在する。古墳からは特に南側への眺望が良く、大和川（佐保川）を眼下に見、二上山—金剛葛城山系—竜門山系—三輪山系までひろがる。ほぼ真南に畠傍山が見え、南東に転じれば香久山・三輪山もよく見える。前方には県浄化センターの大形建物があつて視界をさえ切るが、その間々から島ノ山古墳が見える。西、北方は閉塞された景観となるが、東側は柏木町の民家群を除けば、佐保川～天理市方面の東山々塊にぶつかる。墳丘地目は雜木林で、多数の雜木が茂り、北・西側の段築面には笹竹が茂っていた。戦前には松が林立し、風呂焚用の薪材として地元住民がよく伐採していたという。さて、本墳は從前から墳丘の残存状態が良好なものとして知られていたが、伐採後、はたして二段築成の整美な墳丘が現われた。その段階で墳頂部の盜掘坑が相当の規模に及ぶことも明らかとなった。周囲には堀状の遺構が廻り、特に東側では幅6mと広く、ゴミ捨場と化していた。北側も木材やガラスビンの捨て置かれた状況にあった。¹¹⁾ 北西部は近年道路舗装の際、垂直のコンクリート擁壁が打たれ、堀底まで完全に凌えられた状況にあり、西・南辺は若干の水量を留めていた。この堀は南辺部では削平された墳丘に添うよう直線的な形状を呈し、後世の造作ではないかという疑問が残った。周辺地形をみておく。南側は一枚の果樹園を挟んで約2mほど下がり、畑地一水田を経て徐々に南へ傾斜しながら大和川の氾濫原地帯へと続く。西側は畑地一枚を経て民家へと続く。北側には額田郡北町と柏木町をつなぐ小道が墳丘に添って弧状に走っている。¹²⁾ 最近建てられた数軒の分譲住宅があり、その東側は果樹園、さらに北の畑地へと続く。東側は竹藪でそれ以東は柏木町の民家群である。松山古墳は基本的には北西から南東にのびる尾根状の地形にのっていることになる。周辺を含めれば大略北から南へ下がる緩斜面に立地していることになる。ちなみに、地形分類上は中位段丘面となっている。

地形（別添図参照）

測量図を見れば一目瞭然、整美な二段築成の円墳であることが判る。ただ、南側の墳丘第一段目が大きく削平され、墳頂部にも東西7m、南北13mの大規模な盜掘坑があるなど完存状態にあるわけではない。そこでまず、比較的残存状態の良好な東西方向の断面（X=−155217.000m LINE）で得られる計測規模を示す。第一段目上部径47.7m、第一段目平坦面幅（段築面幅）5.6~8.4m、第二段目下部径33.3m、第二段目上部径（墳頂部平坦面径）14.5m、第二段目高3.6m。次に墳丘南北側（Y=−20147.600m LINE）での計測値を示す（南側での計測が不可能な部分についてX=−155217.000m LINEから北側の計測値の倍数値を記す）。第一段目上部径51.8m、第一段目平坦面幅（段築面幅）8.9m、第二段目下部径34.0m、第二段目下部径34.0m、第二段目上部径（墳頂部平坦面径）15.0m、第二段目高4.0m。上記のように各計測箇所によってその数値に若干の開きがある。もとより、整美な円墳といっても完全な正円ではなく、各所にいびつな部分をもっている。まして、堀部に堀状遺構が周全するために第一段目下部径（堀部径）の正確な値は把みにくく、この部分はある程度の復元値に揃らねばならないと思う。ここで墳丘の現状をやや詳しくみ



写真2
墳丘遠景（南から）



写真3
築成の状況（東から）



写真4
西側裾部（北から）



写真 5
北側堀部（西から）



写真 6
北西側堀部（北東から）



写真 7
南側堀部（西から）

ておこう。裾部には壠状造構が全周する。東側では幅4～5mと広く、最大幅は東南部で6.1mを測る。他の部分では幅3m前後、深0.8mほどである。この造構は、西・南西・南側では直線的に廻る。南側の状況をみれば判るように、墳丘を削平した後に掘削しているのは明らかであり、後述するトレンチ調査の所見によっても裏付けられる。北側から流れ込む雨水を溜め、東南隅から南側の畑地・水田への用水を確保するために設けられたものと考えられる。開削の時期は不明である。墳丘段築面の幅は広く、大略8～9mの幅をもつ。平坦面といってもゆるやかな傾斜をもっている。北東部段築面の端部に若干盛り上ったところがあるが、壠状造構の凌濛に伴い排土を積み上げたためと思われる。また、東・東南側は他の地点より等高線が密になり他の部分の段築面より傾斜があるが、この部分にも開削時の排土や凌濛土が積まれているものと思われる。第二段目の等高線はほぼ正円に近く廻る。二段目の裾部は東・西側で標高50.40～50.60mの等高線に、北側では50.00mの等高線邊でおさえられる。南側は不明である。また、南側で二段目裾部と段築面の傾斜変換点が南へ開き気味になっているが、これは墳丘削平に伴う崩壊や盜掘時排土の崩落流入によるものと考えておく。墳頂部はほぼ平坦で、最高所で標高54.017mを測る。中心部から南南西方向にかけて幅7m×13m、深0.6mの大規模な盜掘坑があり、排土を南側の斜面へかき出しているようだ。ただ、その割には南斜面の等高線の乱れは少ない。次に周辺の微地形について触れておく。南側は一枚の果樹園を経て約1.5m下がり、さらに畑を経て約0.5m下がるなど、南の氾濫原地帯に向って徐々に傾斜する。南西側もよく似た状況で、先の1.5mの段差が屈曲しながら北西方向へのびる。この段差は地形分類で段築面（崖）とされているが、人工改変地形である可能性も含み置きたい。ただ、古墳築造時の改変地とは断言できない。西側は畑地を経て住宅群に至る。北側も畑地と住宅である。北西側、民家との間に南北10mにわたり、比高2.4mの急な法面が残存している。もちろん人工的改変を受けているが、冒頭で述べた西崎古墳の墳丘東裾部の一部である。この場合、西崎古墳の墳丘も径約50mほどの円墳と推定され、大形円墳が2基併立するという特異な状況があったことが考えられる。¹³⁾ 2基は相当近接した位置関係をもち、墳丘据でわずか20mほどしか離れていないこととなる。北東部は果樹園、荒蕪地、畑地であり、緩斜面となっている。が、北東端の二枚の畑地と荒蕪地は周囲より約1.0m低く、東方に開く谷状地形の基点となる部分である。東側は竹藪であり、全体として北から南へゆるく下る。最高所で49.40mの等高線がめぐる。この等高線は墳丘段築面を走る標高であり、つまるところ、墳丘東側部分では、墳丘第一段目と周辺地形が大きな比高差をもたず比較的水平に続いていると考えられる。竹藪の東側には民家が取り付き旧地形は察し難いが、おそらくは緩斜面が続いていたものと思われる。

上記の記述を参考に、墳丘規模について再度取りまとめておく。ある程度の復元的計測値を含みつつ東西方向の断面を中心に算出される規模は下記の通りである。

墳丘径（第一段目下部径）	52.0m	第一段目上部径	49.0m	第一段目高	1.60m
第一段目平坦面幅（段築面幅）	9.0m	第二段目下部径	33.0m		
第二段目上部径（墳頂部平坦面径）	15.0m	第二段目高	3.7m	墳丘総高	5.4m

2 トレンチ調査

トレンチの設定と目的

前述のように測量の結果、幾つかの確認事項が明らかになった。まず、現況から後世の造作と判断された堀状遺構について、築造当初の周堀を拡張する形で設けられている場合も想定されたため、築造当初の結界施設の有無とその規模を明らかにするため第1トレンチを設定した。次に、帆立貝形の前方後円墳あるいは小規模な造出しを有する円墳である可能性もあったため、その可否を判断するため第2トレンチを設定した。トレンチは畠地・果樹園の栽培種の間々をねって設定せざるを得なかつたため、いずれも小規模なものに留っている。

第1トレンチ

西側の畠地に設定した幅2m、長さ11.5mの東西方トレンチである。堆積層は、①表土層、②淡褐色土層、③淡褐色土層、④淡茶褐色土層、⑤淡明茶色土層、⑥明茶褐色土層、である。第②・③層は腐植土、第④～⑥層も擾乱を受けた層である。地山は明茶色の砂質層である。地山面の西3分の2はほぼ水平であるが、東側は堀に向って傾斜する。この落込み内に堆積した土層にも新しい遺物が含まれており、プライマリーな堆積は全く認められなかった。調査地の所有者の話によると、以前ゴボウを栽培していたとのことであり、こうした折に深く下げられたものと考えられた。この畠作による地山面の削平を考慮に入れても、築造当初、幅広の堀（濠）が存在した可能性は全くないといえる。東側の落ち込みは、現況の堀状遺構へと続くが、第⑤・⑥層の堆積からみて当初の想定通り新しい時期の掘削と判断された。ただ、その場合、幅は約6mを測ることになる。今一つ重要な可能性は、築造当初に幅狭の周堀が付設されていたが、後世にその位置と重複しつつ堀が掘削された、と考えることである。しかし、今回のトレンチでは検証不可能であり、同時に可能性の論議に終始してしまうので、注意点を換起するに留めこれ以上は言及しないでおく。遺物は各層から30～40点ほど出土している。須恵器・土師器・土師器小皿・瓦器碗・羽釜・陶器・磁器等の小片であり、古代～近世・近代の時期に及んでいる。埴輪片が数点出土しているが、他に古墳に関連すると思われる遺物はない。

第2トレンチ

墳丘南側の果樹園に設定した幅1.5m、長さ13mの南北トレンチ。以前はブドウ畠で鉄骨ハウスが建っていたという。はたして、地表下70～80cmまでは擾乱を受けていた。堆積層は、①表土、②茶褐色土、③淡茶褐色粘質土層、④淡明茶褐色土層、⑤褐色粘質土層、⑥淡明茶褐色土層、⑦褐色砂質土層、⑧淡茶褐色土層、⑨灰褐色土層、⑩灰橙色土層、⑪灰色土層である。内、第③～⑪層まで全て瓦器片を含む中世の堆積層である。確實に中世の遺構内堆積土と判断されるのは第⑩・⑪層の2層である。他は包含層とも扱える層であり、今回の調査では確定できなかった。表土下約0.8mまで掘進したところ、トレンチの西側半分でトレンチ主軸と併行する栗石組の暗渠（幅30cm、深30cm）が検出された。果樹園の排水を担うものであったためこの部分の掘り下げを中止、結局、地

山まで掘り下がったのはトレンチの東半分の幅0.7m、長さ13mの狭い範囲にとどまる結果となった。従って先述のように層序に不確定な点を残すこととなっている。地山の高まりがトレンチの南端部と中央部分の西端に残っているが全形は不明である。北側に向って落ち込む溝状の遺構が検出され、また中央部に割石が2個えきかれていたがその性格は不明である。遺物は第③層以下に多い。中世土器片に混って石製鋤鎌車、円筒埴輪、須恵器片など古墳に伴う可能性の高い遺物、また、奈良～平安時代の瓦片や製塙土器、弥生時代の土器やサヌカイト製石槍などが出土している。いずれも中世の擾乱を伴うものであり、一次資料ではない。さて、トレンチ内で検出した地山の高まりについては、築造当初の地山面より確実に下っていることが明らかである。トレンチを設定した果樹園の東端、竹藪との境目に掘削された溝の断面観察では表土直下に地山が認められる状況であり、やはり以前のブドウ栽培の際に、あるいは中世期の造作によって相当の擾乱を蒙ったものと思われる。従って、この部分のトレンチでは、埴丘裾の確定是不可能であり、仮に当初周堀が伴っていたとしても検証できないことが懸念される。今後、トレンチの位置を十分検討する必要が残された。中世の遺構については調査面積が限られたためその性格は不明であるが、出土した瓦器碗などから、13世紀後半～末ごろの時期に比定された。この時期に埴丘第一段目が大きく取り壊されたことは確実である。が、その意図は判らない。あるいは、大和川を眼下に見おろすことができるという位置の特性が中世期遺構の性格を解明する糸口であるかもしれない。

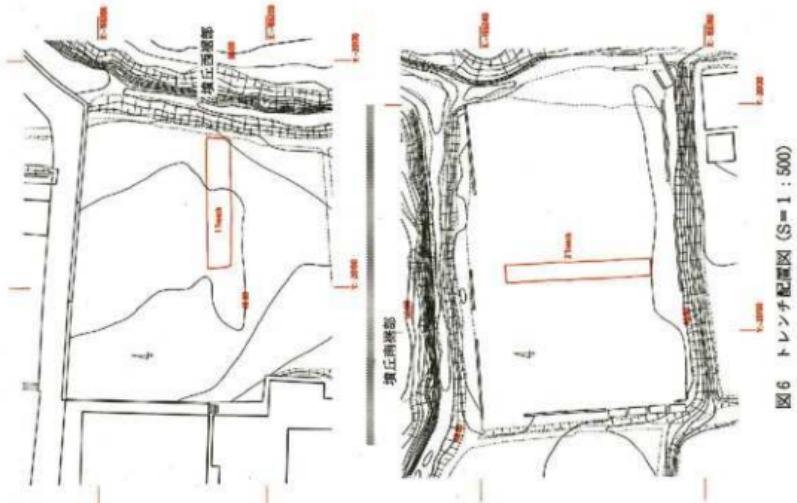
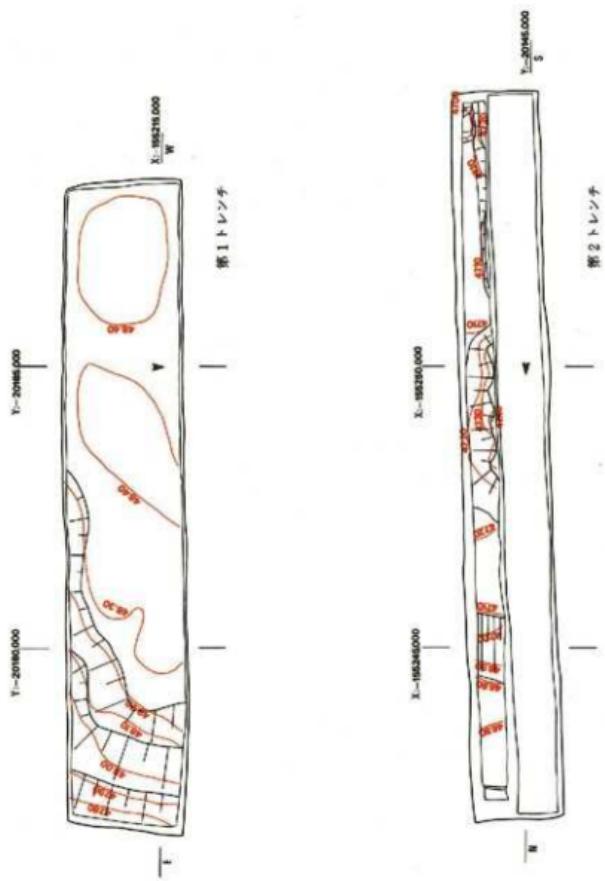




図 8 第1・2トレンチ断面図 ($S = 1 : 100$)



IV 出土遺物

今回の調査による出土遺物はさほど多くはない。以下、表採遺物も含め報告することにしたい。

瓦器輪（図9-1）

第2トレンチ第9層出土。小片で口径は不明、底部と体部の内面に暗文が残る。間隔は荒く線も太い。川越編年第III段階¹⁴⁾の後半、13世紀後半～末の時期

土師器小皿（図9-2・3）

2は第2トレンチ第7層、3は第9層出土。2の復元口径は8.8cm、器高1.3cmを測る。黄茶色を呈し、口縁端部に煤が付着する。3は復元口径9.0cm、器高1.1cmを測る。

平瓦（図9-4・5・6）

4は第2トレンチ第3層出土。凸面に斜格子文を施し、凹面はナデにより平滑に仕上げる。狭端面の調整も丁寧である。灰白色を呈し、堅緻な焼成。奈良～平安時代の所産であろう。5・6はともに第9層出土。双方とも凸面に繩目、凹面に布目が残る。一枚造りである。奈良時代のものであろう。

石製紡錘車（図10-1、図版6）

第2トレンチ第3層出土。径42mm、厚1.5～5.0mm、孔径6.0mmを測る。A面には擦った線状痕がよく残る。対面には最終的な調整が及ばないところが一部認められる。岩種は点紋片岩である。淡緑灰色を呈する。

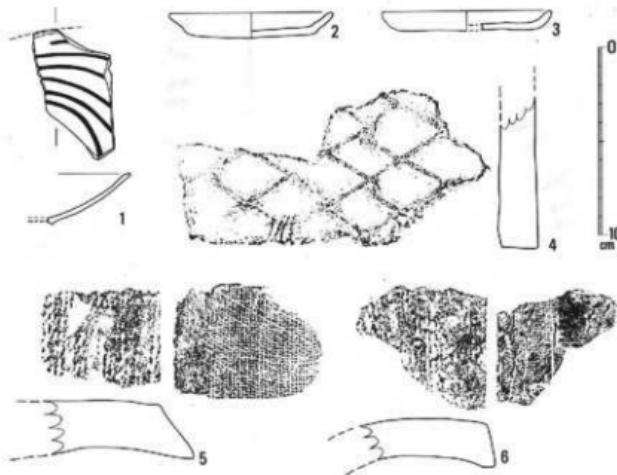


図9 土器・瓦等実測図 (S=1:3)

不明石製品 (図10—2、図版6)

墳丘西裾部での表採品、滑石製である。全形・天地不明。各面とも平滑に整形するがB面の仕上げがやや雑である。側面には各々2条の匙面取りが施される。

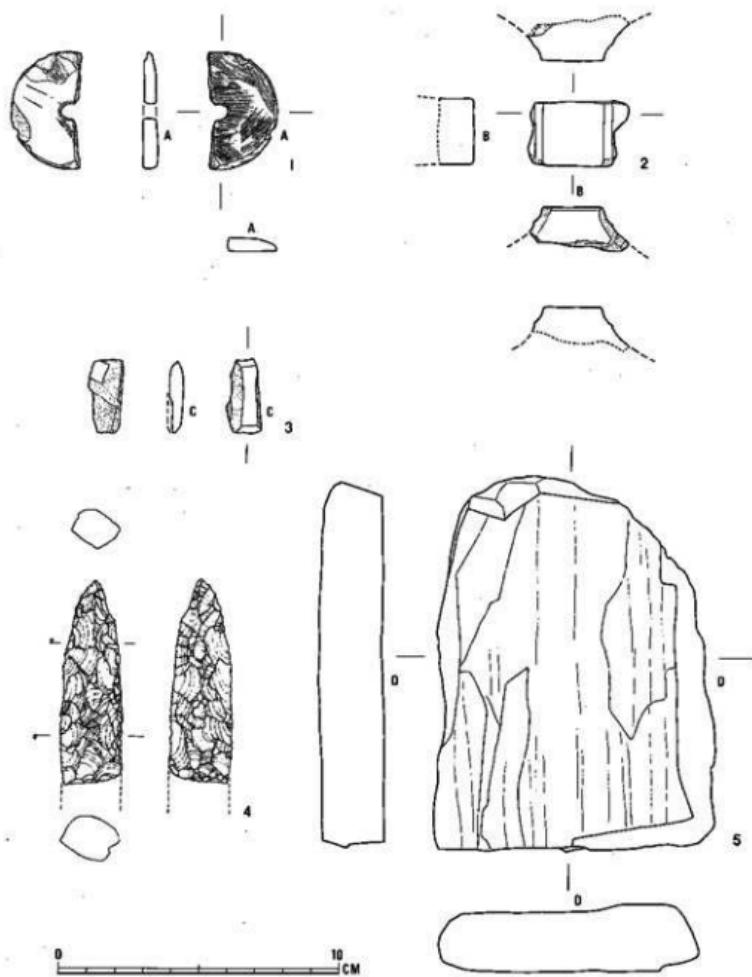


図10 石製品・石器等実測図 (S=1:2)

不明石製品（図10—3、図版6）

第2トレンチ、第7層出土。凝灰岩質片岩製の石製品で、長26mm、幅11mm、厚5.6mmの断片。両端部は両面から削られ尖る。緑灰色を呈する。石包丁の可能性がある。

打製石槍（図10—4、図版8）

第2トレンチ排土表採品。全長72.1mm、幅22.2mm、厚16.1mmを測るサヌカイト製のもの。茎部折損品であるが、折損部に再加工を施し使用する。緊縛部には細かな階段状剥離が認められる。

点紋片岩片（図10—5、図版6）

埴丘北側段築面表採。約139mm×109mm、厚29mmの岩片。本来古墳に伴うものかどうかは不明。点紋片岩は近年、碎石などとして使われる所以注意を要する。

埴輪（図11—1～21、図版7）

第1・2トレンチから出土したもの及び表採した埴輪は図11の通りである。いずれも、良好な状態で出土したものではないので一括して報告する。各個体の出土層位等は表1の通り、小片が多く全形を知り得るものはなく、また、表裏面の剥落が著しく調整も不明なものが多い。まず、焼成状態によって大きく2類に分類しよう。すなわち、A類—通常の軟質（土師質）のもの、B類—いわゆる硬質・須恵質のもの、の2類である。A類は、1・2・3・4・7・8・9・12の8個体であり、この内、3・4・12には黒斑が認められる。A類の突帯はB類に較べて大きく、断面台形を呈するものが多い。ただ、上端、下端部が鋭い稜線をもたず、やや丸みを帯びる傾向がある。調整が判然とするものではなく、多くは淡茶褐色系の色調を呈する。B類は明橙色を呈し、いわゆる硬質の部類に属するもの（5・14・15・16・18・19・20）、灰褐色・灰橙色・灰白色を呈し、いわゆる須恵質埴輪に属するもの（6・10・11・13・17・21）にさらに大別できる。A類に較べ突帯の退化が著しく、特に5・19・20の扁平度が高い。透孔は5・6に認められる。いずれも円形である。調整が判明するのは、10・11・13～21の個体。タテハケが主体であるが、21は唯一ヨコハケが主体である。11・14～18の個体ではタテハケの重複点が認められる。内面にハケメ調整が認められるものは21のみであり、他は全てナデ（タテユビナデ）調整である。さて、ここではA・B類が異なる時期のものか、あるいは同時期のものが大きな問題となるが、この点は次章で検討したいと思う。

なお、上記以外にも古墳に関連すると思われる須恵器片が出土しているので触れておく。ただし、細片の為いずれも図示できない（図版7—A～C）。Cは杯蓋の口縁部、第2トレンチ第11層出土。種は明瞭で、口縁端部は内傾し段をなす。TK47型式。Bは杯身の口縁部、第2トレンチの排土表採品、短い立ち上り部を有し底部外面はへら切り後未調整である。TK209型式。なお、同じTK209型式の杯身が第3層からも出土している。また、TK10型式の杯蓋も第3層に認められる。Aは短脚一段高杯の脚部、透孔の側刃が残る。他に奈良～平安期の杯身片や、壺や壺の破片が多数出土しているが割愛する。

表1 墳輪出土層位一覧 (2T: 第2トレンチ)

実測図番号	出土層位	分類
1	2T 第9層	A
2	"	A
3	"	A
4	"	A
5	2T 第7層	B
6	2T 第3層	B
7	墳丘南斜面表採	A
8	"	A
9	2T 第9層	A
10	"	B

実測図番号	出土層位	分類
11	2T 第7層	B
12	2T 第9層	A
13	"	B
14	"	B
15	2T 第3層	B
16	2T 第7層	B
17	2T 第3層	B
18	2T 第7層	B
19	"	B
20	"	B
21	墳丘南果樹園表採	B

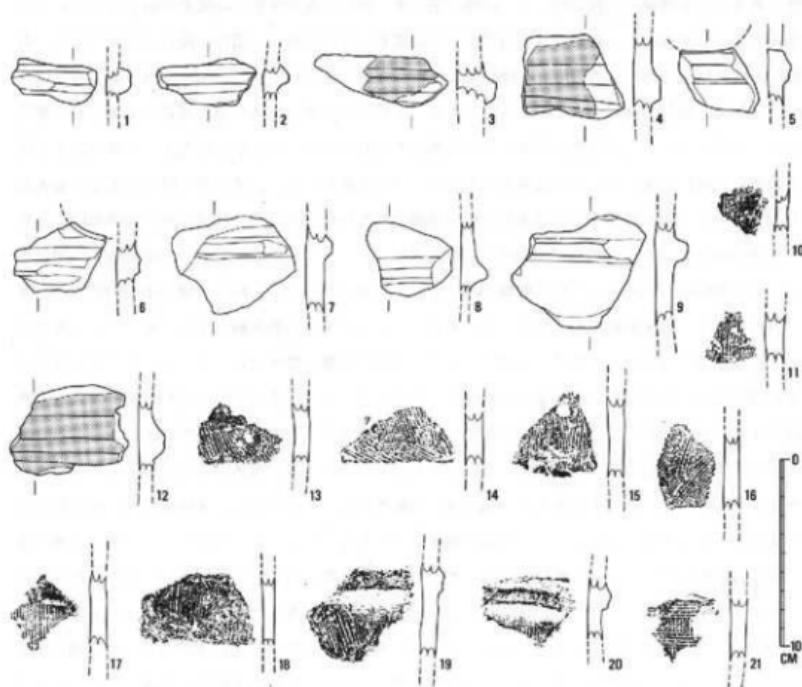


図11 墳輪実測図 (S=1:3)

V まとめ

以上、過去2年にわたる調査について、その概要を報告した。向後の調査の進展に委ねるべき点も多いが、これまでの成果を総括し、次年度以降の調査に備えたいと思う。そこでまず、松山古墳の外形について再確認するとともに各々に若干の付言を要しつつ取りまとめておく。

(立地) 丘陵緩斜面

(墳形) 二段築成円墳

(規模) 径52.0m、高5.4m (詳細は第Ⅱ章に記述)

まず、立地について。ゆるやかに南に向って傾斜する場所を選地する。周辺の状況からみて大きく尾根筋が張り出すような地形ではなく、なだらかな起伏が続く比較的平坦な場所に築造されている。従って、周囲からも比較的目立つような立地を探っていたと考えられる。特に、南側の低地からみた場合、墳丘が一段と大きく見える。これは古墳の南側に段丘崖と考えられる段差があるためであり、その視覚的効果を高めている。この段丘崖については、こうした点から人為的な改変地の可能性もあることを指摘しておいた。さて同時に墳丘第一段目と周辺地形の高低差が最も高いのもこの南側である。すなわち、北側では周辺地形との高低差はさほど無く、墳丘一段目は目立たない。東側でも同じ状況であり、周辺地と一体化するような様態であるのに対し、南・南西方からみた場合は、明瞭に一段目が盛り上ってみえるのである。もちろん、墳丘自体が南へ傾斜する緩斜面に築造されているのでこうした様態を呈するのは当然かもしれないが、とにかく南方からの眺望にある程度意識して墳丘を築いているのは確実であろう。立地状態からみて、墳丘第一段目は地山を最大限利用していると思われる。これは東側竹藪の境溝の断面観察、あるいは、墳丘裾の崩壊断面から知れる地山面の高さと周辺地形との相関から推定されよう。次に墳形について。二段築成の円墳であり、その規模から大和では大形の部類に属することは明らかである。松山古墳の墳形の特色は、第一段目が低平で段築面幅が異状に広い点にある。このため墳丘の側面観は上から押しつぶされたような感じを強く与えるのである。大和でもこうした墳丘形態の類例ははっきりしておらず、他の大形円墳の墳丘との比較検討が必要とされるところである。さて、実は今一つ墳形に関して大きな課題がある。帆立貝形古墳、あるいは小規模な造出を有する円墳である可能性である。これは、削平を受けた現存墳丘南側の果樹園部分に想定されるものであるが、既述のようにトレンチ調査では判断できなかった。もともと前方部・造出部の可能性が云々されるのは、果樹園部分が南北約20m×東西約30mの方態を成し、かつ、周辺の畠地よりも約0.2m高くなってしまい、またその方態が墳丘第二段目裾のラインの延長線上にうまく整合するように取り付いている、といった状況があるからである。ただ、トレンチ調査で明らかになったように、この部分は中世期の削平と近～現代のブドウ栽培により大きく改変されており、それだけに現況は、前方部・造出部が存在した根拠には到底なり得ないものであろう。また、トレンチ内で明らかとなった地山面削平の状況からみて、この部分でのトレンチでは墳丘裾や前方部・造出部の有無の検証ができないのではないかという危惧も

残る。なぜなら、墳丘裾の標高とトレンチ内の地山面の標高の差が約1mもあり、なおかつ第1トレンチで明らかになったように周堀を伴わないとすれば、墳丘裾部はすでに削平されてしまつており検出できないからである。ただ、南北方向のトレンチだけではなく、東西方向のトレンチによって確定する方法も残されており、今後の調査ではこの点に十分考慮して掘り進める必要があると考える。ともあれ、現時点では円墳という認識に留めておくのが妥当と思われる。規模については、今後の墳丘部でのトレンチ調査によって少なからず変更を必要としよう。現況では既述の数値が妥当なものと思われる。ただ、例えば墳丘径を52.0m、第一段目上部径を49.0mとしたものの、この円を重ね合わせると現況とうまく整合しない部分も出てくる。特に墳丘の北北東と西南西裾部が1~2m外方に出ており、全て正円に収まるわけではない。とりわけ、現況の裾状造構を後世の造作とみなしているので墳丘裾のラインの確定は難しい。なお、墳丘段一段目裾部斜面の傾斜は約45°とみなしている。次に外部施設について若干ふれておく。第1トレンチの項でも述べたように周堀（濠）の存在は否定されている。ただ、部分的な堀の存否については確定していない。およそ古墳である以上、何らかの施設で周辺地との区別が成されると考えておいた方がよい。本墳の場合、北、東側の周辺地と墳丘第一段目の比高差があまり大きないので何らかの結界の施設が必要とされるところであろうか。部分的な堀、墳丘背後の堀割り、平坦地などが造作されていた可能性もあると思われる。この点は以後の調査に委ねておこう。葺石・埴輪について、葺石は全く確認されていない。埴輪については墳丘から表採したものは2点のみで、執容に歩き回った割にはあまりに少ない。第2トレンチから数十点出土しているが、この出土埴輪については中世の堆積層からの出土であり、さらに、異なる時期の埴輪が混在している可能性があるので注意する必要がある。この埴輪については後で詳しく検討したい。

さて、立地・墳形・規模については上述の通りであるが、問題は築造時期である。残念なことに今回の調査では築造時期を決定するほどに良好な遺物群は得られなかった。全て中世の堆積層からの出土遺物が表採遺物なのである。しかしながらその中に石製品や埴輪・須恵器など古墳と関連すると思われる遺物が含まれており、築造時期を推定する手掛りになるのではないかと思う。一方、築造時期を確定する上で重要な一次資料が、眼前に横たわる墳丘そのものであることも忘れてはならない。幸い時間はないがお金があるので、この点についてやや冗長に総括しておきたい。まず、大和の大形円墳の中で松山古墳の位置付けを、主として墳丘形状の変遷という視点から検討しておう。

大和の大形円墳については、これまでに石部正志氏、佐々木好直氏が言及しており、こうした先学の成果を参照しつつ考えてみたい。「大形」の範囲を直径40m以上とし、主として伴出する埴輪によって時期毎に纏めたのが表2である。埴輪による時期決定には関川尚功氏による大和の大形古墳の編年案を大部において援用させていただいた。また、埴輪が出土していない古墳については主体部の副葬品組成から帰属時期を判断した。終末期の古墳については、横穴式石室や須恵器の編年観を援用してきる。それでは各時期ごとの特徴をみていく。

第Ⅱ期（4世紀後半）

富雄丸山古墳、別所下古墳、マエ塚古墳など6古墳が上げられる。内、丸塚古墳は古い調査例なので不明な点が多い。富雄丸山古墳が径86.5m、高10.5mと群を抜いて巨大であるが、他は径40~60mほどに収まる。主体部が知れるものは4例あり、全て割竹形木棺を収める粘土槨である。石製模造品や琴柱形石製品など前期後半に特徴的な遺物がみられる。全周する周濠を伴うものはマエ塚古墳のみであり、ナガレ山北3号墳、別所下古墳では部分的周濠が付設される。一方、富雄丸山古墳、薦ヶ峰古墳では周濠は無い。富雄丸山・別所下・マエ塚は2段築成であるが、薦ヶ峰・ナガレ山北3号墳では段築は認められないようである。丘陵部に立地するものが多いが、富雄丸山古墳のように尾根稜線頂部を利用するもの、なだらかな低丘陵に立地する別所下古墳や丘陵間の平坦地を利用する薦ヶ峯古墳など、立地の様相は一様ではない。墳丘は主体部に粘土槨を構築する必要からも、頂部平坦面が十分に確保されたものが多い。内、ナガレ山北3号墳の墳丘は、この時期のものとしては異状に腰高で頂部平坦面が狭いなど留意しておきたい。富雄丸山・薦ヶ峯は単独墳であるが他は、別所下・ナガレ山北3号墳—ナガレ山古墳（全長106m）、マエ塚—佐紀陵山古墳（全長207m）丸塚古墳—瓢箪山古墳（全長96m）、という具合に、ほぼ同時期の大形前方後円墳に附属立地する様相を示す。

第Ⅲ期（5C前半）

9古墳が例示される。埴輪が知れるのは6基であり、他は副葬品組成や立地・存在形態からこの時期に入れておいた。茶臼山古墳については資料がほとんどなく、今後の検討に委ねる部分が多い。コンビラ山古墳は墳丘の遺存度は悪いが、最近の調査で径95m、高12.7mと判明、大和で最大規模となった。五条近内古墳群の盟主墳たる鎌子塚古墳が径80m、高12.5mである。従前、富雄丸山古墳と近内鎌子塚古墳の2大円墳が各々大和の北と南の関門に位置しているという意義付けについて、コンビラ山古墳の所見は再考を迫ることとなった。他は径40~50mの規模である。この内、埋葬主体が知れるのは寺口和田13号、三陵墓西古墳の2基のみである。いずれも粘土槨であるが、前者では箱形木棺を収め、後者では粘土棺床を伴わず被覆粘土も薄いなど、盛期の粘土槨より後出の要素が認められる。前時期に較べて平坦地・緩斜面に立地するものが目立ってくる。コンビラ山・みやす・鍋塚・茶臼山・大和第21号・接上鎌子塚南古墳などである。一方、依然丘陵上に立地するものもみられる、鎌子塚は尾根稜線の頂部を利用するが、寺口和田13号墳は稜線部をさけて立地する。周濠について、コンビラ山・茶臼山古墳は全周するようであり、鍋塚にも伴うようである。鎌子塚古墳では部分的に掘削状の遺構が認められる。2段築成のものが多いが、段築面をそれほど広くとらないようである。寺口和田13号墳では明瞭な段築ではなく、この時期まで築成を伴わないもののが存在するようだ。鎌子塚・鍋塚・寺口和田13号墳は単独墳として存在する。一方、コンビラ山・茶臼山古墳—篠山古墳（全長210m）、みやす古墳—室大墓古墳（全長238m）、大和第21号墳—コナベ古墳（全長204m）、三陵墓西塚古墳—三陵墓東塚古墳（全長90m）など前方後円墳に附属する

立地形態をもつものも多い。

IV期（5世紀後半）

2基しか判らない。坊塚は径60m、木棺直葬墳である。丘陵の先端を利用し、背後を掘り削り埴丘を築く。2段築成である。河合丸山古墳は平坦地に立地、径48m、2段築成で埴輪、周濠をもつ。坊塚は単独墳、丸山古墳は河合大塚山古墳（全長215m）に付属するようだ。類例が少なく特定の傾向は導き出せないが、第Ⅲ期と較べて大きな変化はないようである。

第V期（6世紀）以降

第V期の埴輪を伴うのは藤ノ木古墳のみである。出土須恵器はTK43型式であり、第V期でも最末期に位置付けられる。他の古墳は大形横穴式石室を伴う終末期古墳の範疇に入るので、須恵器型式や横穴式石室の型式から比定される時期に従って述べる。6世紀末～7世紀中葉の時期であり、牧野・越塚・ムネサカ1号・塚穴山古墳などが上げられる。径45m～49mと比較的同規模のものがそろう。塚穴山古墳は径63.4mと最大規模をもつ。主体部は全て大形横穴式石室で、家形石棺を伴う。いずれも単独墳であり、ムネサカ1号墳のように数基で構成される場合も、前～中期にみられたような從属性の位置を占めるわけではない。藤ノ木古墳・塚穴山古墳は比較的平坦なところに立地するが、他は全て丘陵上である。丘陵に立地する場合、特徴的な埴丘の構築方法を探るものが目立ってくる。いわゆる山寄せの技法である。牧野古墳は山寄せの初現的埴丘をもつ。丘陵の先端部を遷地、背面を掘り削る。越塚も同じような築き方である。ムネサカ1号墳は尾根腹部の緩斜面を遷地、背部を浅く掘り削る。割塚古墳の立地については不明な点が多いが、古い地形図上でみると尾根の先端部に遷地しているようであり、牧野古墳のような構築方法を探っていたことも推察される。塚穴山古墳は空堀と幅14.9mの外堤を伴う特異なものである。この時期にも前代に引き続き2段築成が多いが、牧野古墳のような3段築成も出現する。同じ2段築成といっても前代とは異なる大きな特徴が出てくる。第一段目が低く、段築面幅が狭いこと、埴丘頂部平坦面が狭くなること、径に比して高さがあることなどであり、その結果、全体としていわゆる腰高の埴丘をもち、截頭円錐形に近い形となる点である。この特徴は、大形横穴式石室を内蔵する必要から必然的に生じたものであろう。

以上、大和の大形円墳について時期別に検討を行った。第IV期～第V期の類例が少なく、特に6世紀前半の例が皆無であるなど、あるいは、詳細な測量図が完成していない古墳も多く、専ら資料的制約が大きい中で総括せざるを得ない状況である。第II～IV期では各時期を特徴付ける埴丘形態は指摘し得ない。おそらく堅穴系の埋葬施設をもつため埴丘形態に大きな変化がないのであろう。一方、6世紀末以降になると腰高で截頭円錐形に近い埴丘が現われることが指摘できた。ただ、この時期に至っても前代と同じような埴丘形態をもつものも存在するので留意する必要があろう。つまりところ、埴丘形態の変遷という観点からは、松山古墳の築造時期は決めかねる、ということである。

表2 大和の大形円墳一覧

川西河原地塊										古墳名	存在形態	所 在 地	立 地	延 高	周 長	主 体 形	出 土 物	文 献
II	II	4	4次半	富士丸山	单	奈良市大和田町字丸山	丘陵地盤斜面部	86	10.5	無	無	無	無	無	土器+竹筒+漆器 円筒+漆器(漆器)等	須田原24m	1	
II	II	"	別所下	(今井山) (全高60m)	北端斜面台状地	低丘陵	58	6	2段	5~7m (部分)	無	無	無	無	土器+漆器(漆器)等 円筒+漆器(漆器)等	長15m幅9mの突出した枝	2	
II	II	"	マエ野	(佐久山) (全高50m)	赤坂町河合町御前原	丘陵地盤	61	7	2段	1~ 20m	無	無	無	無	土器+漆器(漆器)等 円筒+漆器(漆器)等	須田原24mの突出する外観 外環(部分)有	3	
II	II	"	萬ヶ塚	单	奈良市佐久町2029	丘陵地盤斜面部	40	5.3	無	無	無	無	無	無	土器+漆器(漆器)等 円筒+漆器(漆器)等	須田原24mの突出する外観 外環(部分)有	4	
"	"	丸塚	(雲母山) (全高50m)	奈良市佐久町御前原戸門	低丘陵	45	5.5	無	無	無	無	無	無	土器+漆器(漆器)等 圓錐+刀柄	須田原24mの外壁部と複数 先行する弓型柱有	5		
II	II	"	ナガレ山 3号	(大和山) (全高65m)	北端斜面台状地斜面	丘陵	60	/	/	5~7m (部分)	無	無	無	無	土器+漆器(漆器)等 円筒+漆器(漆器)等	須田原24mの外壁部と複数 先行する弓型柱有	6	
III	III	5C半	楠子塚	单	五条市近内	丘陵地盤	80	12.5	2段	5~7m (部分)	無	無	無	無	土器+漆器(漆器)等 円筒+漆器(漆器)等	須田原24mの外壁部と複数 先行する弓型柱有	7	
III	III	"	コシラカ山	(雲母山) (全高30m)	大和郡白川町山字今森敷	平坦地	95	12.7	/	5m	無	無	無	無	土器+漆器(漆器)等 円筒+漆器(漆器)等	須田原24mの外壁部と複数 先行する弓型柱有	8	
III	III	"	みやす	(雲母山) (全高30m)	新城市字西一ノヤス	丘陵地盤 (部分)	50	7.5	2段	10~ 15m	無	無	無	無	土器+漆器(漆器)等 円筒+漆器(漆器)等	須田原24mの外壁部と複数 先行する弓型柱有	9	
III	III	"	楠塚	单	北端地盤斜面竹内	泥炭地盤 (部分)	46	6.0	(2段)	10~ 15m	無	無	無	無	土器+漆器(漆器)等 円筒+漆器(漆器)等	須田原24mの外壁部と複数 先行する弓型柱有	10	
"	"	寺口和田	单	北端地盤斜面寺口	丘陵	50	6.	/	/	無	首次	無	無	土器+漆器(漆器)等 円筒+漆器(漆器)等	須田原24mの外壁部と複数 先行する弓型柱有	11		
"	"	茶臼山	(雲母山) (全高40m)	大和郡白川町山字馬籠越	平坦地	50	6	2段	5~7m の 傾斜	有	有	有	有	土器(漆器)等 円筒+漆器(漆器)等	須田原24mの外壁部と複数 先行する弓型柱有	12		
"	"	大和草引	(コナベ) (全高30m)	赤坂町佐久野	平坦地	42	/	/	/	無	無	無	無	土器(漆器)等 円筒+漆器(漆器)等	須田原24mの外壁部と複数 先行する弓型柱有	13		

III	*	越上崎子 海岸	崎子原 (全长10m) 三脚礁石壁 (全长约2m)	新所市佐原字崎子山 平田地	全幅 丘陵	50 40	5~9 2段	有 有	内海地輪 (有潮)	潮汐露出部分18m 潮汐露出部分10m	14	
IV	*	三脚礁西 岸	山辺野瀬村河原之庄 丘陵	丘陵地川合町北田 丘陵地川合町字山川 平田地	丘陵 丘陵地	60 40	2段 2段	有 有	有 有	有 有	15	
IV	5 C	浅半 村家	北島崎地川合町北田 北島崎地川合町字山川 (全长25m)	丘陵地川合町字山川 平田地	丘陵 丘陵地	40	2段	有	内海地輪	内海地輪 内海地輪 (有潮)	16	
IV	*	丸山 大里山 (全长25m)	大里山市千日町字泰山 生神町字泰山 (有潮)	丘陵地川合町字山川 平田地	丘陵 丘陵地	50 48	4.5 7.6	2段 2段	有 有	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	17
V TK45 TK200 7 C	*	利泽 平	生神町字泰山 (有潮)	丘陵地川合町字山川 平田地	丘陵 丘陵地	60 60	10 10	3段 3段	有 有	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	22
6 C 8 C	*	松原 平	生神町字泰山 平田地	丘陵地川合町字山川 平田地	丘陵 丘陵地	60 60	10 10	3段 3段	有 有	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	18
—	*	越前 村家	板井市原原字坂原 坂井市原原字坂原	丘陵地川合町字山川 丘陵地川合町字山川 平田地	丘陵 丘陵地	96 80	6 6	2段 2段	有 有	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	19
7 C 8 C 9 C	*	A A Y A K A 1号 单	板井市原原字坂原 坂井市原原字坂原	丘陵地川合町字山川 丘陵地川合町字山川 平田地	丘陵 丘陵地	96 96	6 6	2段 2段	有 有	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	20
7 C 中	*	琴穴山 单	天理街沟田町 天理街沟田町平原	天理街沟田町平原 平田地	丘陵 丘陵地	46 50	6以上 5	主幅9.5m 以上	有 有	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	21
地盤不詳		平原 单	天理街沟田町平原 平田地	天理街沟田町平原 平田地	丘陵 丘陵地	60			内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	22	
*		富田内 单	奈良市宝来町字宝来町 (全长22m)	奈良市宝来町字宝来町 平田地	丘陵 丘陵地	50	5	2段	有 有	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	5
*		田原西 单	奈良市关田原町字西山 湖内字平原	丘陵地川合町 湖内字平原	丘陵 丘陵地	42	10		有 有	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	5
*	アフリ	单	北島崎地川合町 湖内字平原	丘陵地川合町 湖内字平原	丘陵 丘陵地	42			有 有	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	6
*		瓦屋3号 (全长10m)	生神町沟田町三井 瓦屋3号 (全长10m)	丘陵 丘陵	丘陵 丘陵	40			有 有	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	内海地輪 内海地輪 内海地輪 内海地輪	24

\は不明項目

单：单处立地

表3 大和の大形丹墳 主要文献一覧

- 1) 久野邦雄・泉義政「富雄丸山古墳発掘調査報告」(『奈良県文化財調査報告書』第19集) 1973年
原義統「青龍」「白虎」(『新編』第59号) 1986年
- 2) 東浦・坂崎「別所下古墳発掘調査報告」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』1986年度) 1987年
- 3) 小島俊次「マエ橋古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第24冊) 1989年
- 4) 中井一夫「マエ橋古墳」(『奈良県文化財調査報告書』第28集) 「奈良県古墳発掘調査報告I.J」 1970年
- 4) 薩井利章「嵩ヶ峯古墳発掘調査報告」(『奈良県道路調査叢報』1979年度) 1981年
- 5) 奈良市史「奈良市史 考古編」1983年
- 6) 河合町教育委員会「河合町道路調査報告」(河合町文化財調査報告 第4集) 1990年
- 7) 五條市役所「五條市史 新編」1987年
- 8) 大和高田市教育委員会「コンビニ山古墳第1次発掘調査報告」1991年
- 9) 繪子・大字宝みやす古墳」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第12編) 1959年
- 10) 梅元哲也「編塚古墳発掘調査監修」(『奈良県道路調査報告』1976年度) 1979年
- 11) 伊藤勇輔「寺口和田古墳群第2次発掘調査報告」(『奈良県道路調査監修』1980年度) 1982年
- 12) 大和高田市「改訂大和高田市史前史」1984年
- 13) 末永赳哉「字和那近古墳群の調査」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第4編) 1949年
- 14) 今尾文明也「樅上・櫟上・櫟古墳発掘調査報告」1986年
- 15) 中村春壽・小島俊次「三輪墓古墳調査報告」(『奈良県総合文化財調査報告書 都市郊外地区』) 1952年
- 新井村「慈郎村史」1985年
- 16) 沢上那彦・前園美知雄「佐林田切古墳発掘調査報告」(『奈良県文化財調査報告書』第23集) 1975年
- 17) 間川尚功「河合大澤山古墳・丸山古墳群地の発掘調査監修」(『奈良県道路調査監修』1979年度) 1981年
- 18) 豊郷町・近郷町教育委員会「藤ノ木古墳第1次調査報告書」1990年
- 19) 豊郷町教育委員会「史跡牧古墳」(『豊郷町文化財調査報告』第1冊) 1987年
- 20) 伊通宗義「茂井市舞鶴墓跡古墳」(『奈良県文化財調査報告書』第3集) 1950年
- 21) 小島俊次「古墳」(『長井市古墳監修』) 1986年
- 22) 小島俊次「刺繡古墳の調査」(『青龍』第14号) 1986年
- 23) 竹谷健夫「深穴山古墳発掘中間報告」(『近郷参考館報』第3号) 1990年
- 24) 近郷町教育委員会「近郷町の古墳」1990年

次に埴輪の検討に移る。まず、額田郡丘陵に存在する古墳で埴輪をもつものが数基確認されているのでそれらを提示する。

南方古墳（図12・13・14）

宅地造成に伴う緊急事前調査で検出した埋没墳である。周溝がかろうじて残存していたため規模が計測できた。径約23mの円墳であり、周溝底幅は3~5.5mである。南へ緩く傾斜する場所に築造されているため、北辺の周溝は検出されていない。溝内から円筒系埴輪・形象埴輪の破片が多量に出土している。溝底からは瓦器の破片も伴出しており、中世に墳丘が削平されたものと思われる。円筒埴輪は、いわゆる須恵質埴輪と軟質の埴輪に大別される。軟質のものは器表の剥落が著しく、調整が良好に観察できるものはほとんどない。黒斑をもつものも皆無である。ここでは須恵質埴輪を図13に示す。いずれも一次調整タテハケ・ナナメハケで二次調整は施さない。突帯は側面が凹み突出度が低い。8の突帯は断面三角形を呈するような退化形態である。内面にハケメが認められるものではなく、ほとんどがユビナデによっている。1・2・9が赤茶色系の色調を呈するが、他は青灰茶色系である。12・13は朝顔型埴輪の口縁部。花状部外面はナナメハケ、内面はヨコハケ（B種）を施す。突帯は比較的突出度が高く安定している。口縁端部は垂直に近い面をなし、12は凹むが、13は直線的に收める。12・13の外面で突帯より下の部分はナデ調整となっているのが特徴的である。14は普通円筒の直上型口縁部、外面にヨコハケを施し、赤紫灰色を呈する。15は一次タテハケ、二次ヨコハケ調整を施す。青灰色で須恵器みたい。ヨコハケを施すのはこの2個体のみである。普通円筒の口縁部にのみ限られる調整であろう。11は盾形埴輪。隅角を欠き直弧文を施す。裏面には何

ら文様はない。焼成は土師質である。図14は大刀形埴輪の把頭から鞘口部の断片である。把頭は、短辺4.0cm×長辺15.5cmの台形を呈する。把部円柱の穴がそのまま開いているが、台形の粘土板が貼付され矢視を構成していたことも考えられる。把間は最大径7.5cm、最小径6.7cmの中空円柱で、中央部で最も細くなる。把頭と把口の側辺部に勾金が付く。勾金は長26cm、幅4cm、厚1cmの帶状で、扁平な飾玉が1個表現される。長軸5.2cm×短軸2.6cm、厚0.5cmの不整橢円形である。飾玉の貼付痕が2ヶ所に認められるので、本来3個が表現されていたと考えられる。勾金の先端は把口部で約3cm

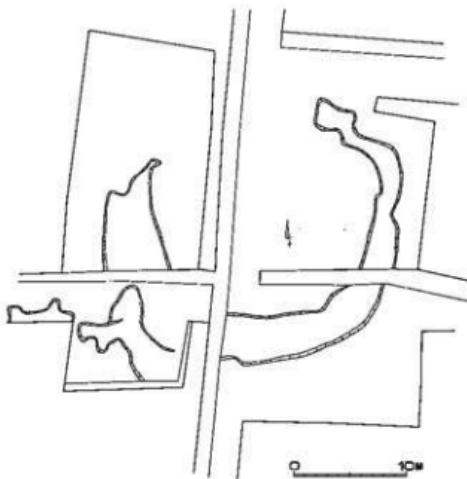


図12 南方古墳平面図

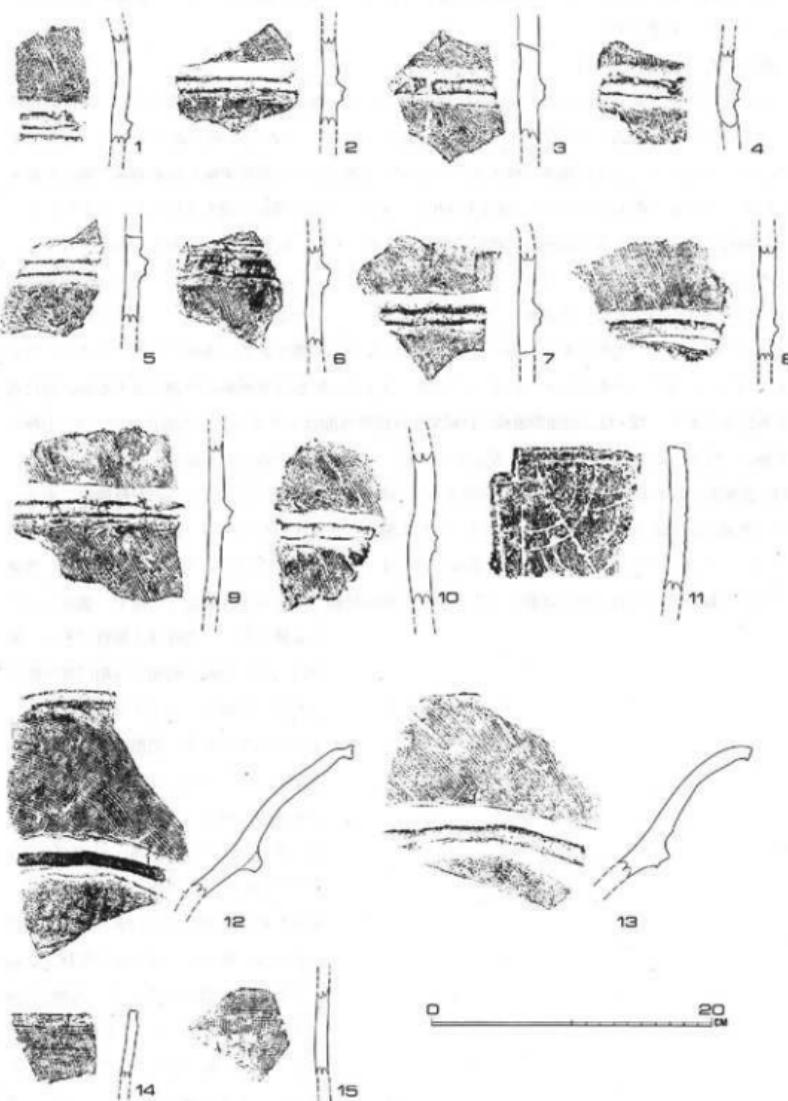
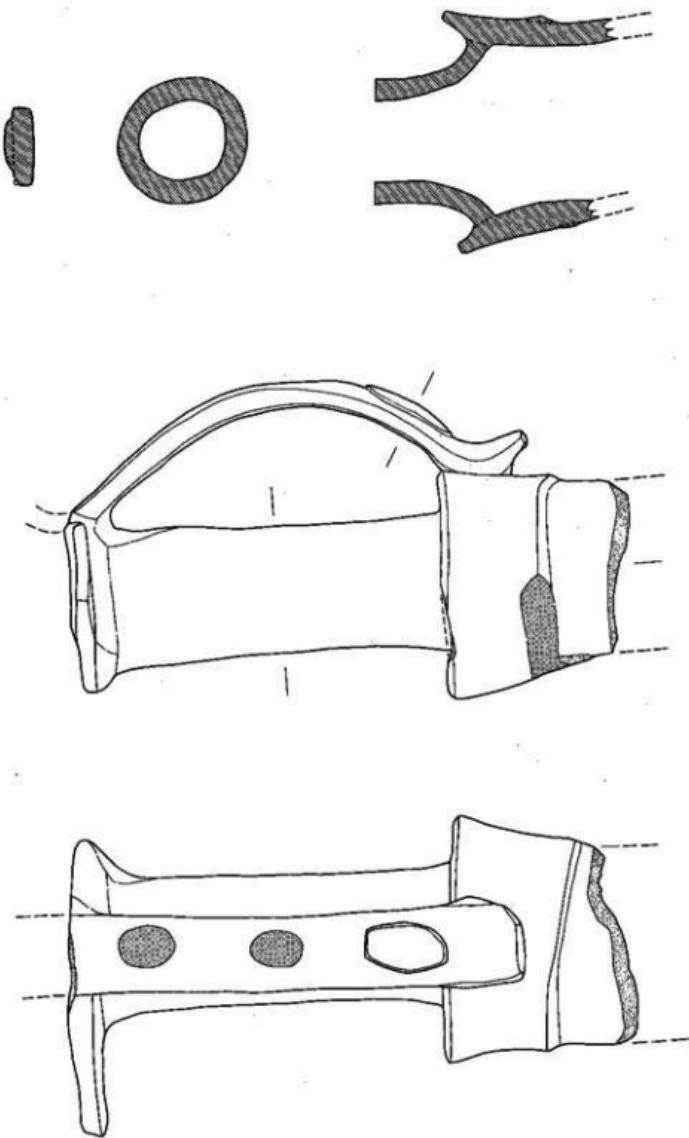


图13 南方古墓出土埴輪实测图 (S=1:4)

图14 南方古堆出土大刀形埴輪実測図 ($S = 1 : 3$)



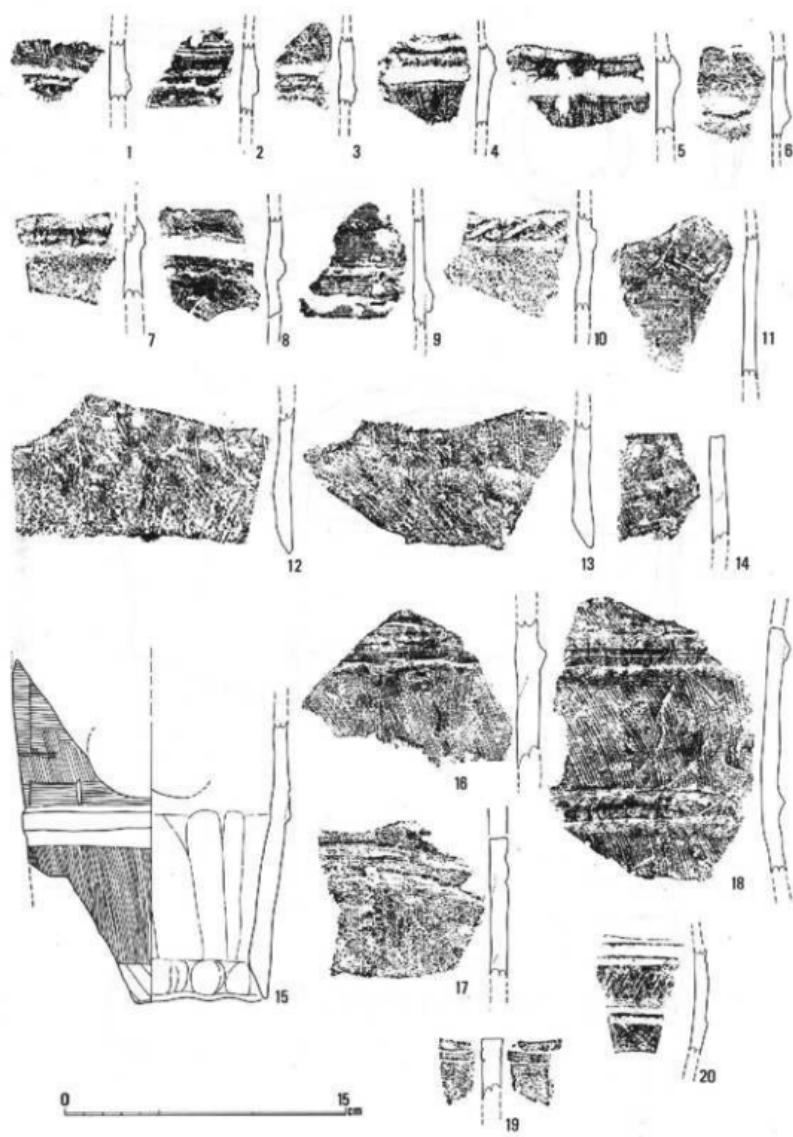


図15 挖ノ内古墳采集埴輪・須恵器実測図 ($S = 1 : 3$)

わたり外反して終る。把頭部の方は折損のため不明である。把頭の軸線に対し勾金は70°に近い角度に取り付ける。把口と鞘口は、幅1cm、高0.3cmの低い断面三角形の突帯で区分されるが、突帯の造作は粗雑である。鞘の大部分は不明であるが、鞘口部の一部に主軸方向に切り込んだ痕跡が併列して認められ、その間が剥がれているので何らかの突起形状のものが表現されていたと思われる。基本的に粘土紐の積み上げと貼付技法により造形をはたすが、把部と把口部は、径の小さな中空円柱（把部）をより径の大きい中空円柱（把口～鞘口部）に差し込み、接合部の内外面に補充粘土を巻く技法を用いる。胎土は砂粒を多く含み、焼成良好、円柱部内面・把頭外方面は黒茶色、外面は茶褐色を呈する。彩色は認められない。

振ノ内古墳（図15）

西町環濠集落の北東端に残る径25mの円墳、墳丘は削平され、現在は畠地・駐車場となっている。総じて小形・薄手の埴輪で、15から知れる底径は約12cmである。黒斑をもつものなく、全て硬質埴輪の部類に属する。外面は一次タテハケ、二次調整にB種ヨコハケを施すが、B種が認められない個体も多い。内面はほとんど全てナデ調整である。突帯は相当扁平化の進んだもので、造りも粗雑である。10の突帯には斜めに板状具で押したようた痕跡が残る。認められる透孔は全て円形である。15から推して偶数段に對向して穿たれていたのであろう。14は口縁部である。12・13・15は底部で、先細りする離脱型底部調整を施し、外面に押圧痕、内面に指頭痕が顕著に残り、底面は波うった状態である。¹⁹⁾ 19は、蓋形埴輪の四方飾板、あるいはその縁飾りの断片。二条の併走する沈線が認められる。20は須恵器・器台の杯部と思われる。波状文と縦格子叩きがあり、幅広の凹線が三条廻る。

轟田部糸塚古墳（図16）

周濠部で數次の調査、墳丘裾部で立会が數回行われている。かつて報告したものと一部重複するが諒解いただきたい。軟質・硬質・須恵質のすべてを含み、黒斑のあるものはない。2次調整はヨコハケで、動作単位が長く、C種ヨコハケ様のものが多い。1は普通円筒の口縁部で、タテハケ後ヨコハケを施す。ヨコハケは約3cm間隔で施し、原体幅も約1.5cmと狭い。器表の装飾的効果を兼ねているような施し方である。同じようなヨコハケが、4・7・8に認められる。8も1と同じ普通円筒の口縁部、7は朝顔型の口縁部であり、口縁部（最上段）にはこうした調整が主流を占めるようである。2・3・11ではヨコハケを密に施す。内面ではヨコハケを施すものが多い。突帯は比較的大ぶりであるが、側面が凹む傾向が強い。6・7の朝顔型の突帯は高く、特に6は異状である。

船墓古墳（図17）

船墓は径約20mの円墳とされるが、条里図のX線写真から、前方後円墳とみた方が妥当と思われる。²⁰⁾ 6・7は突帯部断片。側面と下面が一体化し、断面三角形を呈する。外面には一次調整のタテハケが残る。細密なハケである。1は口縁部、5は底部である。5には底部調整を施すが、枝法の実態が判然としない。6は須恵器・器台の杯部と脚部の接合部、外面に斜位のタタキ目が残る。

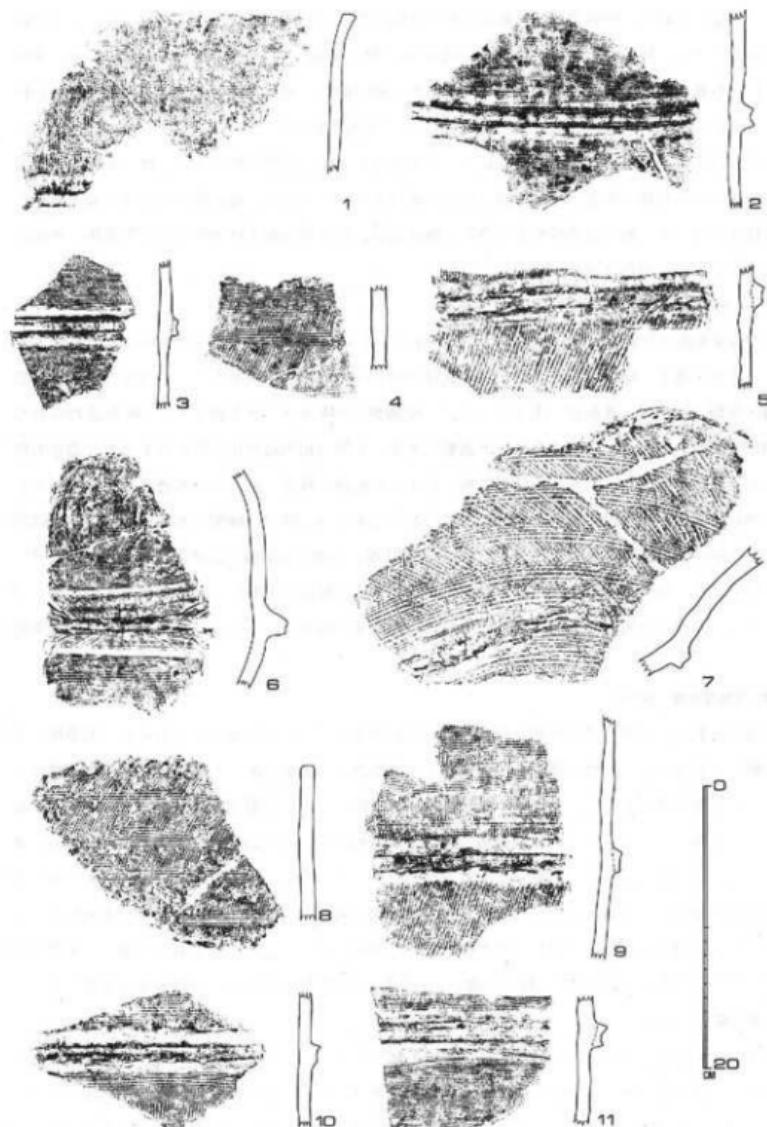


图16 颗田部孤塚古墳出土埴輪実測図 ($S = 1 : 4$)

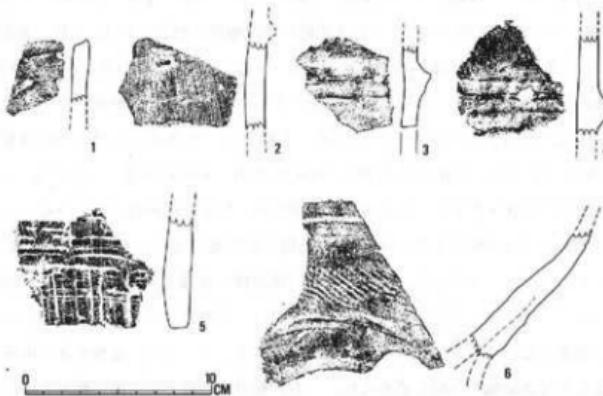


図17 船墓古墳採集埴輪・須恵器実測図 (S=1:3)

以上、額田部地域の埴輪について報告した。まず、その編年的位置付けを検討しておこう。南方古墳の埴輪は、口縁部に一部ヨコハケが残存するものの、ほとんど全てが一次調整のみで終っており、川西第V期に比定できる。また、船墓古墳もこの時期に比定できると思う。掘ノ内古墳は、底径12cmほどの小形のものである。外面調整ではB種ヨコハケがあり、その休止軸も垂直に近いなど第IV期の特徴をもつ。ただ、第V期の特徴である離脱型底部調整も認められるのである。外面の調整技法に古い要素が残存したとみるか、底部調整の早い時期の出現例とみるか、各々の見方によって大きくその評価がかわる。一般に第IV・V期には群集墳に供献される小形のものと、前方後円墳をはじめとする大形古墳に使用される大形品が存在することはよく知られているが、これら埴輪の規格によって調整技法の消長が異っていることを考慮しなければならないと思う。例えば、離脱型底部調整などは、小形で軽量化されたもので初めて実現可能な技法であり、大形埴輪では据置型の底部調整にとどまっているのである。従来の円筒埴輪編年が主として大形品を材料に組み立てられていたことを考えると、第IV・V期にあっては小形粗製のタイプの編年を別個に考える時期にきていると思う。狐塚古墳の場合、ヨコハケが外面二次調整に多用されているので、第IV期に入れられているが、従来6世紀の前半の築造と考えられており、推量するに須恵器型式でいえばMT15型式²¹⁾の時期に当るのではないかと思う。この時期は、川西編年の第V期新相の時期に該当し、大きな矛盾を生む結果となっている。比較的遅くまでヨコハケが存続するのか、あるいは第IV期と第V期が重なり合うのか、第IV・V期の細分化が急務と思える今日このごろである。ともあれ、これら埴輪の編年序列については早急な結論を出さないでおきたい。今は各古墳の特徴をまとめ松山古墳出土資料との比較材料としたいと思う。

さて、松山古墳に伴うと推察される埴輪は、先述のようにA類（軟質一有黒斑）とB類（硬質・須恵質一無黒斑）の二類に大別された。これを単純に川西編年に照会すれば、A類一第Ⅲ期、B類一第Ⅷ期となり、二時期の埴輪が混在することになる。では、A類とB類が共存する可能性はいのだろうか。焼成段階に窯窓が導入される第IV・V期に至っても依然として野焼きによる有黒斑埴輪が²²⁾生産されていることが早くから指摘されている。大和では、五条丸山古墳（TK216期）、下明寺古墳（TK47期）、引ノ山8号墳（TK47期）、岩室池古墳（6世紀中葉）などであり、5世紀後半～6世紀中葉まで第IV・V期をすべて包括する期間中共存する例が知られている。こうした例を参照すれば、当然共存の可能性も考えられ、A・B類を製作地の違い、あるいは製作集団の違いに帰結することもできる。しかし、先に概観した額田部地域の埴輪でみると、A類とB類が共存する例はまったく無いのである。南方古墳・狐塚古墳の場合、土師質のものと須恵質のものが各々含まれているが、前者において黒斑を有するものは皆無である。このように盆地全体を視野に入れればかなり遅くまで有黒斑埴輪の存続が認められ、一方、額田部地域という狭い範囲に限れば存続の事実は今のところ認められないである。つまるところ、現時点では何ともいえない、逆言すれば、何ともいえないといった状況にしかないのである。何となれば、今回報告した埴輪のほとんどが、畠地からの表採遺物であり中世堆積層内からの出土遺物であるなど、埴輪が確實に松山古墳に伴うものであるという前提自体が確定されていないというきわめて不安定な状況の中での検討であり、早急な結論は控えたい。

以上、大和の大形円墳の埴丘形態の変遷という観点から、あるいはまた、額田部地域の埴輪の変化という観点から松山古墳の位置付けについて総括した。しかし、不明・不確定な部分を多く残し、今後に委ねられた課題はあまりにも多い。が、ぼちぼち掘って結論を出してゆけばよいと思う。龜の歩みの如き進展をみる調査も、一顧の価値はあると思う。

註

1. 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館『大和を掘る－1990年度発掘調査速報』1991年
2. 大和郡山市教育委員会『古代通信No.1 原田遺跡とその時代』1991年
3. 泉森岐「額田郡孤塚古墳発掘調査概報」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第17編) 1967年
大和郡山市教育委員会『額田郡孤塚古墳周濠部発掘調査概要報告』(『大和郡山市文化財調査報要1』) 1984年
4. 特野久「額田郡連と飽波評」(『日本政治社会史研究』上) 1984年
5. 田村吉永「額安寺草創所見」(『大和志』第5巻第12号) 1988年
6. 地元では「サンジョ山」、「サンジョウ山」とも呼ばれているが、表記が不明であるため該地の小字名を付すこととする。
7. 東京大学史料編纂所『日本古圧縮図聚影』3(近畿2) 1988年
8. 前園実知雄「額安寺旧境内発掘調査概報」(『奈良県遺跡調査概報1985年度』) 1986年
9. 岸熊吉「三井窯址及び額田郡窯址調査報告」(『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第13編) 1935年
10. 奈良県教育委員会『重要文化財額安寺五輪塔修理工事報告書』1983年
11. 道路改良工事の際、市教育委員会が調査を実施した(1990年3月)。
12. 1987年11月、この開発行為に伴う簡便な調査が県教育委員会・市教育委員会によって実施されている。
13. 現在、埴丘は相当削平された状態にある。蓋石・埴輪等はまったく知らない。
14. 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」(『文化財論叢』) 1983年
15. 石部正志「大和の大形円墳」(『未先生米壽記念文献論文集』乾) 1985年
16. 佐々木好直「奈良県の円墳」(『古代学研究』第123号) 1990年
17. 関川尚功「大和における大型古墳の変遷」(橿原考古学研究所紀要『考古學論叢』第11冊) 1985年
18. 各古墳の文献については逐次明記しない。表3を参照されたい。
19. 整形台から離脱させて行う底部調整を「離脱型」、対して整形台に据えたまま施すものを「据置型」とする。
20. 服部伊久男「国宝額田寺伽藍并条里図にみえる基について」(『考古学と生活文化』同志社大学) 近刊
21. 1985年の埴丘部分の立会調査で、この時期の須恵器片(無蓋高杯・器台・壺等)が採集されている。

註17前掲書

図 版



(1) 航空写真（北上空から）



(2) 遠景（南西から）



(1) 墳丘近景（北から）



(2) 墳頂部の状況（西から）



(1) 墓丘細景（北東から）



(2) 墓丘細景（南東から）



(1) 第1トレンチ全景(東から)



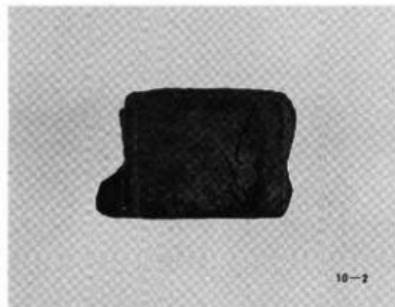
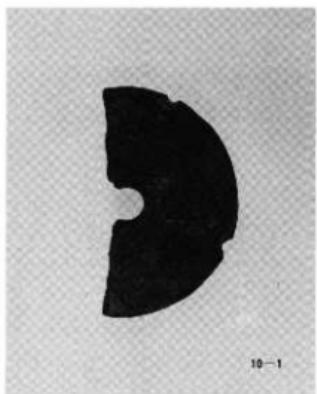
(2) 第1トレンチ土層(北東から)

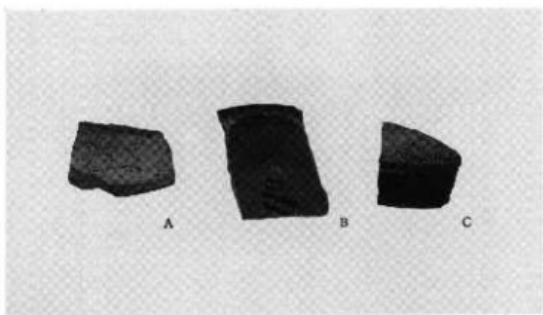
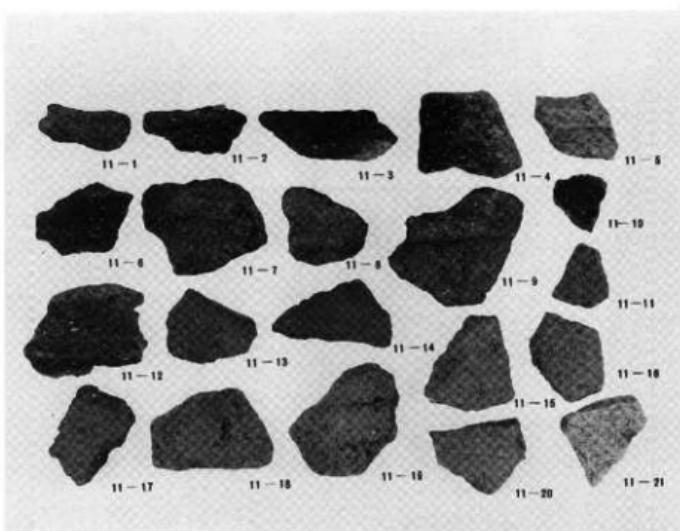


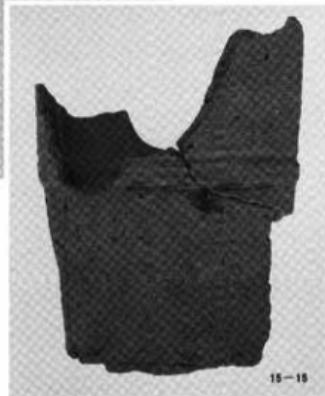
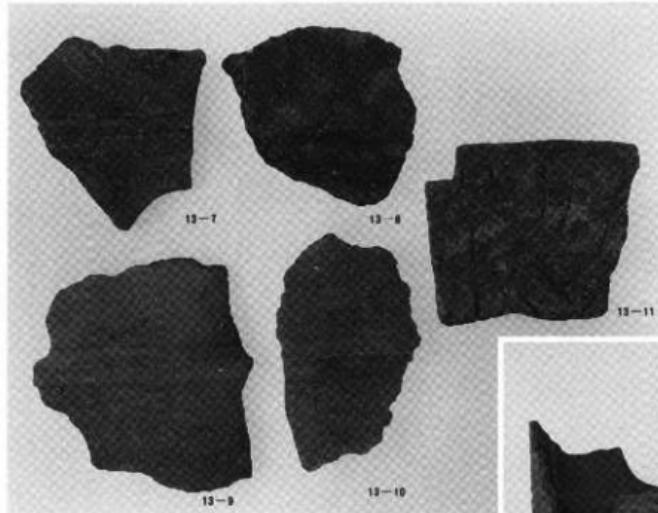
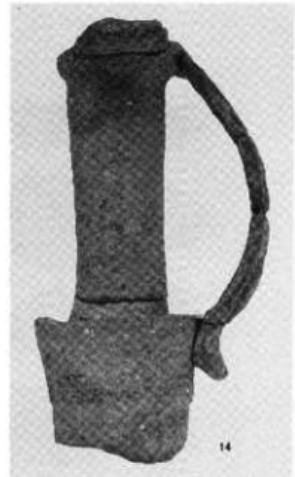
(1) 第2トレンチ全景（北から）



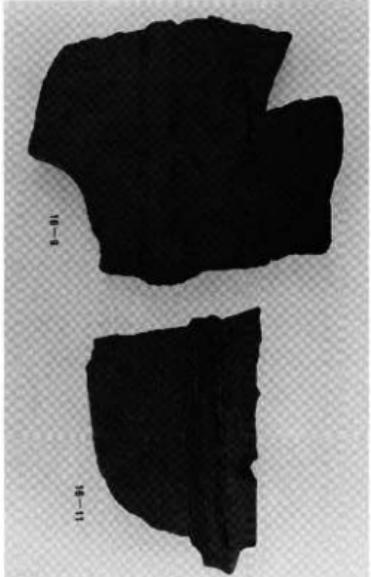
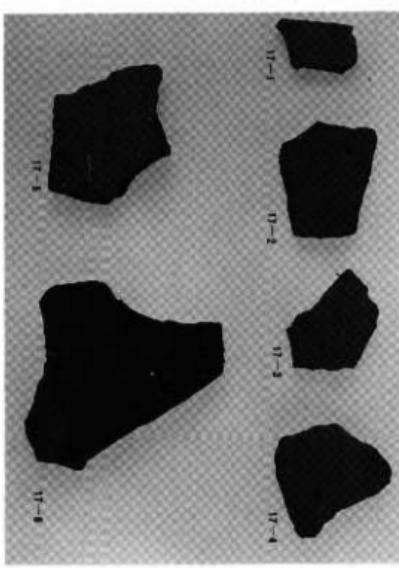
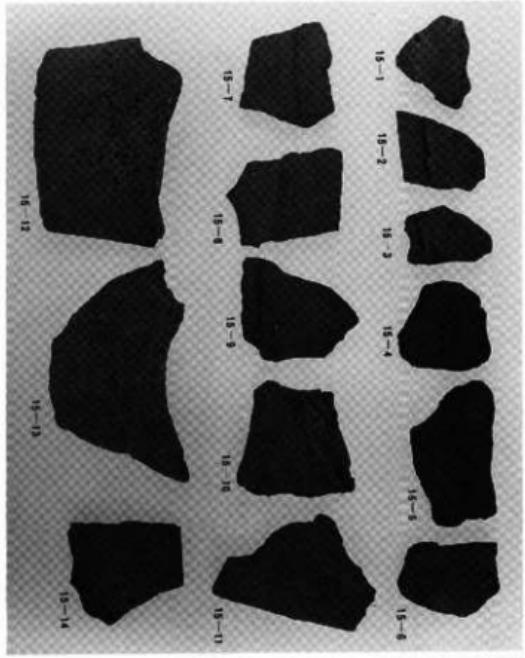
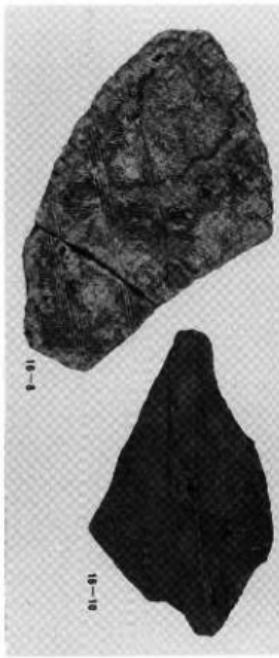
(2) 第2トレンチ土層（北西から）







圖版 9 振八內古墳、狐塚古墳、船墓古墳埴輪





大和郡山市文化財調査概要21

松山古墳 I

第1・2次発掘調査概要報告書

平成3年3月31日発行

編集 大和郡山市教育委員会

発行 大和郡山市北郡山町248-4

印刷 明新印刷株式会社

奈良市橋本町36
